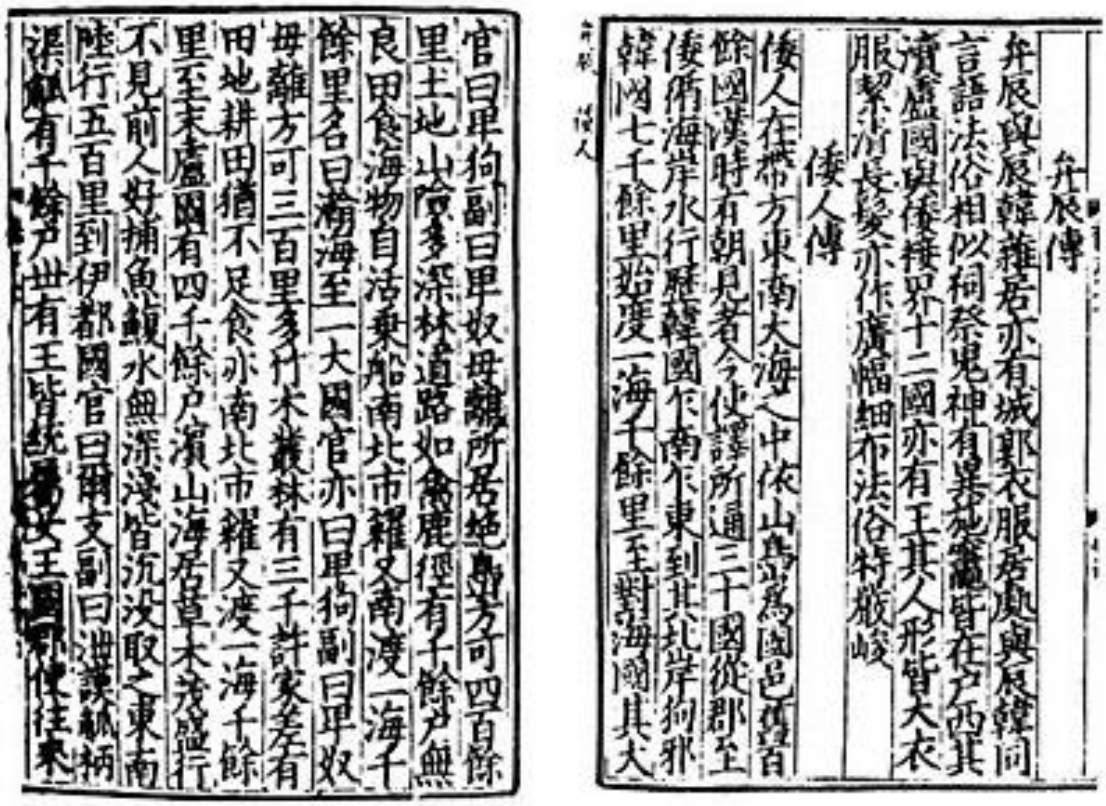
正史を彷徨う

Part I

森隆一



弁辰傳

弁辰與辰韓雜居亦有城郭衣服居處與辰韓同言語法俗相似祠祭鬼神有異施竈皆在戶西其瀆盧國與倭接界十二國亦有王其人形皆大衣服絜清長髮亦作廣幅細布法俗特嚴峻

倭人傳

倭人在帶方東南大海之中依山島為國邑舊百餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪韓國七千餘里始度一海千餘里至對海國其大官曰卑狗副曰卑奴母離所居絶島方可四百餘里土地山險多深林道路如禽鹿徑有千餘戶無良田食海物自活乘船南北市糴又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國官亦曰卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹木叢林有三千許家差有田地耕田猶不足食亦南北市糴又渡一海千餘里至末盧國有四千餘戶濱山海居草木茂盛行不見前人好捕魚鰒水無深淺皆沉没取之東南陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨觚柄渠觚有千餘戶世有王皆統屬女王國郡使往來

（Wiki「魏志倭人伝」より）

プロローグ

中国の正史は次の王朝が前の王朝の歴史を書くこととされているが、後の時代に作成された王朝も幾つかあった。前王朝の悪政により滅亡に至ったこととそれを滅ぼした自己の正当性を主張するために書かれたと読んだことがあるが、これは本当かどうか疑わしい。滅亡するには悪政があった場合が多く、ほぼ事実を書けばよいと思われる。ただし、全ての記録を収録することは不可能であり、記事の選択は作者の意向による。

高句麗・百済・新羅を扱った三国史記は上の意味での正史といえるが、日本では、この意味の正史は有り得ない。万世一系の天皇が統治していることより、次の王朝が有り得ないからである。出来るのは〇〇天皇紀の類いであり、実際、日本書紀・続日本紀・日本後紀・続日本後紀・日本文徳天皇実録・日本三代實録が編纂されている。これらは六国史と呼ばれていて、光孝天皇 884-887 までをカバーしている。この後は、正史とみなし得るものは編纂されていない。律令体制の崩壊と関係するのかもしれない。ここでは、この六国史を日本での正史と呼ぶことにする。古事記は日本書紀を補うものとして国史に準ずるものと考えるが、現状では十分に理解することができていない。

唐までの中国の正史は、史記、漢書、後漢書、三国志、晋書、宋書、南斉書、梁書、陳書、魏書、北斉書、周書、隋書、南史、北史、旧唐書、新唐書である。

これらの東夷伝のうちで最も知られているのが三国志魏書の東夷伝であり、この倭人条は魏志倭人伝とも呼ばれてもいる。漢書には東夷伝はなく、替わりに、巻九十五 西南夷兩粤朝鮮伝が書かれている。史記も同様で、巻一百一十五朝鮮列伝である。朝鮮に関して書かれている内容は、共に、武帝の衛氏朝鮮征討の話である。この後、明史の李氏朝鮮まで朝鮮は登場しない。陳書と北斉書には外夷に関する列伝がない。

漢書武帝紀では

元朔元年 BC128 東夷蔵君南閭等口二十八萬人降 為蒼海郡

東夷の蔵君の南閭が二十八万人を率いて投降してきた。そこを蒼海郡とした。

三年 BC126 罷蒼海郡　　蒼海郡を廃棄した。

と書かれている。これが正史における東夷に関する最初の(記年)記事と思われる。この次の記事は、

元封二年 BC108 朝鮮王攻殺遼東都尉 乃募天下死罪擊朝鮮

朝鮮王は遼東郡の都尉を攻殺した。(武帝は)死罪と朝鮮を撃つことを天下に募った。

三年 BC108 朝鮮斬其王右渠降 以其地為樂浪 臨屯 玄菟 真番郡

朝鮮がその王右渠を斬殺し投降してきた。その地を樂浪・臨屯・玄菟・真番郡とした。

である。この４つの郡が漢四郡あるいは朝鮮四郡と呼ばれるものである。臨屯郡と真番郡はBC82年に廃止され、楽浪郡は313年に玄菟郡は404年に高句麗により滅ぼされた。この経緯から、武帝の時代に東夷が登場し、遼東郡の東に、蒼海郡を設置した。衛氏朝鮮を征討した後四郡を置いたが、楽浪郡以南は領有する価値が無いと判断され、廃郡されたのではないかと考える。武帝の頃は遼東郡より奥地を朝鮮と呼んだのではないかと考える。この範囲は、凡そ、現在の北朝鮮と韓国と満州東南部からなる。

　倭が正史に登場するのは後漢書以降、唐書(旧・新)までで、後者では、倭と日本が共に取り上げられている。後漢書の倭条の最初の文は

倭在韓東南大海中　　倭は韓の東南の大海の中にある。

で後漢書で取り上げられている東夷の国は、倭の他には、高句驪・東沃沮・北沃沮・濊・韓が取りあげられている。三国志には倭条ではなく倭人条となり、

倭人在帯方東南大海之中
　倭人は帯方郡の東南の大海の中にいる。

で始まる。倭人以外には、夫余・高句麗・挹婁・濊・韓などが取り上げられている。後漢書で韓条の始めは

韓有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁辰 馬韓在西 有五十四國 其北與樂浪 南與倭接 辰韓在東 十有二國 其北與濊貊接 弁辰在辰韓之南 亦十有二國 其南亦與倭接

韓には馬韓・辰韓・弁辰がある。馬韓は西に在り、54 カ国からなる。北では楽浪郡と接し、南では倭と接する。辰韓は東に在り、北は濊貊と接する。弁辰は辰韓の南にあり、また 12 カ国からなる。南では倭と接する。

であり、馬韓と弁辰は南で倭と接すると書かれている。三国志でも

韓在帶方之南，東西以海爲限，南與倭接

韓は帯方郡の南にあり、東西は海である、南は倭と接する。

と書かれている。

この記事の不整合がもう少し正史を眺め考えていくきっかけとなった。ここで、テキストをどうするのかがまず問題となった。

簡単に入手できるものとしては「倭国伝」（藤堂・竹田・影山訳、講談社学術文庫）が挙げられるが、東夷伝の全てが取り挙げられてはいない。さらに、全ての正史の訳は有るか無いかもわからなかった。ここで、Web surfing をしているうちに Wikipedia の中国版である「維基百科」と「維基文庫」にいきついた。維基文庫は漢字文献のディジタル図書館ともいえるもので史書・典籍から小説・経典まで網羅されている。本稿では、この維基文庫を用いることにする。

「維基文庫」→史書→正史で、url は

https://zh.wikisource.org/wiki/Wikisource:史書#正史
である。
底本については、書かれているものと書かれていないものがある。恐らく、上海古籍出版社から出版された「続修四庫全書」ではないかと思っている。
一部のテキストは簡体字で書かれているため、諦めかけたが、次の web site を見つけた。
「どんと来い中国語」→中国語の簡体字と繁体字を相互に変換
これを利用して、繁体字に変換した。url は
https://dokochina.com/sim2traconv.php
である。この site では「ピンイン変換」を行うことも可能である。

この他に、随時参照した web site を挙げておく。

＊ 日本語 Wikipedia。これは Wiki「項目」で示した。

＊ Wiki「元号一覧（中国)」: 正史の記事の記年の西暦はここから求めた。

＊ 空企画「歴代天皇・皇居等一覧」: 天皇の在位期間を「空企画」で参照することが主である。これは、確実な天皇の在位期間から、日本書紀の天皇の在位年数を基に、在位期間を逆算したものとみられる。 url は
http://www.kuu-kikaku.jp/rekishi/tennou-ichiran.html

＊「ウィクショナリー」
https://ja.wiktionary.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8
「コトバンク」https://kotobank.jp/
などの on-line 辞典は重宝した。

本稿では、倭条を主にして、東夷伝を読み考察していくことを目標とする。東夷伝の各国条は、地勢・風俗・国勢(出自・歴史・政治体制)などの概略のあと、記年記事が書かれている。記年記事の多くは朝貢とこれに対する処置と思われ、各部署の報告に基づくものと考える。高句麗では、侵略と征討の記事も多い。風俗や征討の記事は難しい文も多い。地勢・出自と記年記事の簡単なものを主な対象とし、それ以外は解釈できるもので、理解を深めるもののみを取り上げていくことにする。

東夷伝を眺めていると、多くの疑問が浮かんでくる。当面は、疑問やこれに対する感想的考察を挙げていくことになる。ここで、手掛かりとなりそうな疑問と、解決したい疑問を選び、大きなものは番号を付していくことにする。まずは、本稿のモティヴェーションともなった倭の位置に関する疑問を１番とする。

疑問 1. 韓条では南では倭と接すると書かれているのに、倭(人)条では、倭は東南大海中にあると書かれているのは何故か。

本稿の基本的な方針として、正史の記事は史実とする。倭の位置に関する韓条と倭条のように、記事が矛盾する場合には検討をし、一定の解釋を行なう。これらから、作業仮説を設定し考察の基本とする。

三国史記と日本書紀の記事に関しては、まず、正史の記事と対応する記事をさがす。対応がついた記事をA級の記事とする。次に、各国の記事の間で対応する記事を見つける。これらの記事をB級の記事とする。これらの記事から作業仮説を設定する。

大雑把な規準として、各国の王のうち、正史にその名が登場した王以降の記事はほぼ合っていると考えている。今のところ、高句麗では第6代太祖大王宮53-146、百済では第14代近肖古王346-375、新羅では第23代法興王514-540と考えている。倭(日本)については、ほぼ確実なのは、推古天皇(聖徳太子)と考えている。

続いて、作業仮説間の記事の検討を行っていく。現在はこの段階で彷徨っていると思っている。

上記各書の記事に対する信憑度は

高句麗本記 ＞ 百済本記 ＞ 新羅本記 ≒ 日本書紀

と想定している。

訳に付いては、始めは「倭国伝」のものを用いていた。これは(倭国伝)と示した。しばらくすると、タイプに時間がかかることと、引用する部分の訳を全て手に入れることはほぼ不可能であるとわかった。さらに、倭国伝の訳は丁寧なものではあるが、正史の訳としてはどうかと思われるところもみられた。

ここで、「漢字が英語風に並んでいる」との観点から、自分で試みることにした。簡単な文については、利用上は「倭国伝」と大差がなかった。また、訳せないものの多くは、それが無くても、本稿のレヴェルでは殆ど問題にならないように思えた。さらに、このほうが訳をタイプするより遥かに楽しい。この意により、筆者の訳は、訳というよりは、理解した内容と考えて頂きたい。

訳に関して、注意を述べておく。

＊ 倭王が使いを送ることは、正史では 奉貢朝賀、朝獻、遣使、上獻、入貢などが用いられているが、本稿ではこれらの差は影響しないと思われるので、一括して朝貢とした。

＊ 多くの記年記事には月まで記されているが、本稿では殆ど月の差は影響しないので、一部を除いて、月を省略した。

＊ 正史の引用文では維基文庫の書体をそのまま用いたが、その他では新体字を用いるようにした。

＊ 引用した記事のうち、難しい個所と殆ど用いないと思われる箇所は訳を放棄し、・・・で表した。

他には

＊ 筆者が作成した(引用のない)地図は

「CraftMAP」 http://www.craftmap.box-i.net/world.php
の白地図を基に作成した。

＊正史の引用は簡略化した「〇〇書△△条」で行う。

＊ 正史の引用文で 〇/△ となっている箇所は簡体字から繁体字への変換の候補で選べなかったものである。

1．後漢書の時代（倭奴国と邪馬臺国）

ここでは後漢書の巻八十五東夷列伝第七十五倭条を見ていく。倭条以外については、必要な部分の引用に留める。

Wiki「後漢書」では

後漢書の成立は5世紀南北朝時代の南朝宋の時代で編者は范曄398-445である。宋の創始者劉裕に仕えて尚書吏部郎となったが、元嘉9年432事件を起こし、左遷されて宣城太守になり、在任中に後漢書を著したとされている。范曄が執筆したのは本紀と列伝のみである。

と書かれている。後漢の滅びたのは220年で、後漢書の編纂から200年ほど前のことである。明治元年は1868年あるから、明治からは160年程で、現在で見れば江戸時代の末期の前の天保時代を語ることになる。なお、三国志は陳寿により280年頃に著された。こちらは魏の滅亡後15年程である。

三国志と比べてみると、後漢書は三国志のダイジェストに後漢時代の記事を併せたように見えることから、ここでは、三国志と共通するところは三国志の所で扱うことにし、後漢時代の記事を主に考えることにする。倭国以外は書かれた順に考察していくのが筋であるが、ここでは必要な記事のみを引用して用いることにする。

後漢の成立に関しては、Wiki「光武帝」では

光武帝は王莽により造られた新を滅ぼし、25 年に漢王朝を復活し、武帝時に匹敵するような再興を成し遂げた。この王朝は後漢と呼ばれ、220 年まで続いた。朝鮮では楽浪郡を復興した。この楽浪郡の働きかけに応じて、東夷の諸国が朝貢するようになり、彼らに王侯の位を授けた。

と書かれている。

後漢の時代は、使者は都へは行かず、楽浪郡で止まったと思われる。したがって、東夷伝を書くには朝貢使の会見記録などの郡からの報告書が用いられたと思われる。楽浪郡は 313 年に高句麗により滅ぼされたため、後漢書の編纂時に楽浪郡の記録が残っていたかどうか疑問であるが、後漢から魏・晋へは禅譲であったため、三国志編纂時には魏の記録が残っていたということは当然考えられる。

1.1 倭の位置

初めに、後漢書に現れる東夷諸国の位置関係について主に高句驪条と韓条から見ていく。まず高句麗条では

高句驪 在遼東之東千里 南與朝鮮 濊貊 東與沃沮 北與伕**餘接**

高句麗は遼東郡の東千里に在り、南は朝鮮と濊貊、東は沃沮、北は夫余と接する。

と書かれている。ここでは高句麗と朝鮮は別に扱われている。これは序で武帝について述べたことに反する。武帝の衛氏朝鮮討伐後、東夷の状況がわかってきて朝鮮のイメージが変わってきたことによる考える。地理的状況からは、ここでの朝鮮は楽浪郡ことと考える。ここに現れる、濊・沃沮・夫余は

濊北與高句驪 沃沮 南與辰韓接 東窮大海 西至樂浪 濊及沃沮 句驪本皆朝鮮之地也

濊は北では高句驪と沃沮と接している。東は大海で西は楽浪郡に至る。（今の）濊と沃沮および句驪の地は本の朝鮮である

東沃沮在高句驪蓋馬大山之東 東濱大海 北與挹婁 伕餘 南與濊貊接

東沃沮は高句驪の蓋馬大山の東に在り、東は大海である。北は挹婁・夫余と南は濊貊とに接する。

又有北沃沮 一名置溝婁 去南沃沮八百餘浬

北沃沮もあり、置溝婁ともいう。南沃沮からは 800 里ほどである。

夫餘国 在玄菟北千里 南与高句驪 東與挹娄 西與鮮卑接

夫余国は玄菟郡の北 1000 里に在る。南は高句麗、東は挹婁、西は鮮卑と接する。

と書かれている。蓋馬大山 は白頭山と思われる。

漢の成立は BC206 年である。このうち、BC8 年から 25 年は新王朝で、それ以前は前漢、以後は後漢と呼ばれている。前漢の武帝まで

の遼東郡以東の状況はわからない。プロローグで引用した記事からは衛氏朝鮮は知られていたと考えられる。元朔元年(BC128)の東夷蕞君南閭らが投降してきた記事からは、東夷には蕞君と県程度の勢力がいたことになる。今の段階では、この蕞君と後漢書の濊国との関係はわからない。南閭らに対する聴聞から、朝鮮の地にはさらに多くの勢力がいることかったことが予想できる。蒼海郡は設立されたが、すぐに廃止され、樂浪・臨屯・玄菟・真番郡の四郡が設置された。この後、臨屯・真番の２郡は廃止され、玄菟郡は主として高句麗対策、高句麗以南の諸国は楽浪郡が担当するように変化していく。前漢末から後漢初期にかけて後漢書に記されていることがわかってきたのではないか。これより、本皆朝鮮之地 **の**本は武帝の時代辺りをさすと考える。さらに、武帝の時代では遼東郡以東は朝鮮と呼ばれていたと考えた。後漢書の状況になったのは高句麗の成立からではないかと考えている。蕞と濊は同じであろうか。同じならば、上記朝鮮にいた人々が蕞・濊とよばれていたことも考えられる。参考までに、「ピンイン変換」は

蕞：huì、濊：wèi、倭：wō 、委：wěi

である。

韓条の冒頭は、序文で述べたが、ここで再掲する。

韓有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁辰 馬韓在西 有五十四國 其北與樂浪 南與倭接 辰韓在東 十有二國 其北與濊貊接 弁辰在辰韓之南 亦有二國 其南亦與倭接

韓には三種がある。1つめは馬韓、2つ目は辰韓、3つ目は弁辰である。馬韓は西に在り、北は楽浪郡と南は倭と接する。辰韓は東にあり、十二国があり、北は濊貊と接する。弁辰は辰韓の南にあり、また十二国で、南はまた倭と接する。

東夷諸国の距離については内郡と思われる遼東郡または樂浪郡を基準としていて、高句麗は遼東郡の東千里にある。遼東郡の郡衙から高句麗の都までが千里ということであろう。高句麗の北に夫余、東に沃沮があり、南で朝鮮・濊貊と接している。この朝鮮は楽浪郡のことであろう。この南に馬韓と辰韓が東西に並び辰韓の南が弁辰・倭である。

この状況を下図に示した。

図1　後漢時代の東夷

1.2 後漢書倭条の記事

後漢書東夷列傳倭条は

倭在韓東南大海中 依山島爲國邑 凡百余国

倭は韓の東南の大海中にあり、山や島に国や村があり、百余りの国がある。

で始まる。この記事と韓条の **其南亦與倭接** とは両立しないことは序で述べた。これに

自武帝滅朝鮮 使驛通于漢者三十許國 國皆稱王 世世傳統 其大倭王居邪馬臺國

武帝が朝鮮を滅ぼしたときより、30ヵ国程が漢に使いをよこした。各国は王を称し、代々引き継いでいる。その大倭王は邪馬台国にいる。

が続いている。武帝が朝鮮を滅ぼしたときというのは、漢書武帝本記で

元封二年 BC109 朝鮮王攻殺遼東都尉，乃募天下死罪擊朝鮮

朝鮮王は遼東郡を攻め、遼東都尉を殺した。(朝鮮王に)死罪とし朝鮮を撃つことを宣した。

三年 BC108 朝鮮斬其王右渠降 以其地為樂浪 臨屯 玄菟 真番郡

朝鮮は王の右渠を斬り投降した。その地に樂浪・臨屯・玄菟・真番の郡をおいた。

とある。朝鮮が中国の王朝に知られたときであろう。三国志では 今使譯所通三十國 となっているが、この差異は本稿では影響はない。そこに大倭王がいて、その居住地が邪馬台国ということに着目したい。

大倭王が正史に現れるのはここのみである。王とか大王とか自称が書かれている。国の規模からいって、授けられるのは倭王と〇〇侯と思われることから、後漢の初期には漢王朝の冊封体制には組み込まれていなかったといえる。

大王から連想するのはアレキサンダー大王である。Wiki「アレクサンドロス３世」によれば、

大王の死後アレキサンダー帝国はプトレマイオス朝エジプト、セレウコス朝シリア、アンティゴノス朝マケドニアに分かれた。大王の権威により統合されているが、権威が無くなれば、分裂していく。

蒙古帝国も似た経緯をたどっている。

この後漢書の記事が、正史での邪馬台国の初出であり、後漢書で邪馬台国が現れるのはここのみである。三国志では 南至邪馬壹国女王之所都 と書かれていて、正史で邪馬台(壹)国が現れるのもこ

の２ヵ所である。共に倭王の居る所を指しているので、一般的な邪馬台国を用いることにする。邪馬台国の所在については、朝鮮半島から近畿地方にかけて、色々な説が提唱されている。上記地方で大規模な古代遺跡が発掘された場合、邪馬台国と結び付けた報道がなされている。また、北九州と中国四国地方の瀬戸内海沿岸地帯にはかなりの邪馬台国の候補地がある。情熱をもって、邪馬台国があったという根拠を探し求める人々がいて、その幾つかはかなりの賛同する人がいるということに近いかもしれない。これだけ色々唱えられているということは、「唱えられている邪馬台国の所在地のかなりのものは正しいのではないかと」という発想から、次の作業仮説を設ける。

作業仮説 1.（大）倭王の居住する所が邪馬台国である。

　この作業仮説の検証を念頭に置いて、考察を進めていくことにする。イメージとして、神武東征の雛型となることが行われたと考えている。作業仮説１と合わせれば、倭王が建物を建て長期間居住した所が邪馬台国となる。王の移住を伴うものであるから、東征より東遷のほうがふさわしいと考える。

　後漢書では

樂浪郡徼 去其國萬二韃里 去其西北界拘邪韓國七韃餘里 其地大較在會稽東冶之東 與硃**崖 儋耳相近 故其法俗多同**

楽浪郡と邪馬台国とは１万3000里ほど離れており、西北界の拘邪韓国とは7000里ほど離れている。そこには大きな鮫がいる。會稽東冶之東にあり、硃崖と儋耳に近く、法俗は似ているところが多い。

が続いて書かれている。會稽東冶之東 というのも正史によく現れる。中国王朝の人の倭のイメージであったのであろう。東冶については納得のいく情報は得られなかった。會稽については、Wiki「会稽郡」では

会稽郡は、中国にかつて存在した郡。秦代から唐代にかけて設置された。郡名は会稽山による。史記によれば夏少康の庶子である無余が会稽に封じられ越の始祖になったと伝えられる。春秋時代には越の国都として発展していた。当時、呉と越がこの地域において対立していたが、越王勾践は呉王夫差に敗れて会稽山に逃げ込み、夫差の下僕になるという屈辱的な条件によって和睦し、助命された話が伝わっている。後に勾践は夫差を討って呉を滅ぼすのであるが、この話から、敗戦の恥辱や他人から受けた堪え難いほどの辱めを意味する会稽の恥という故事成語が生まれている。

とある。魏にとっては呉を滅ぼした越に近いということは何らかの期待をいだかせるのであろうか。Wiki 「タン耳郡」からは、BC110年に、海南島に珠厓郡と儋耳郡が置かれたということである。

魏における倭のイメージは、位置的には会稽の東で、風俗的には海南島に近いということである。会稽は呉を滅ぼした越王勾践の都であることから呉と戦っている魏にとっては期待を込めた関心があったはずである。

會稽東冶之東までは三国志の記事のダイジェストと思われる。この後倭の風俗が書かれたあと、3つの記年記事が書かれている。
初めの記事は

建武中元二年57年 倭奴国奉貢朝賀 使人自称大夫 倭国之極南界也 光武賜以印綬

建武中元二年に倭奴国が朝貢してきた。使いは大夫と言い、倭国の最南端であると言っている。光武帝は印綬を与えた。

である。倭奴国は上記30国の1つであろう。使者は大夫と言っていた。大夫は三国志の一大率や百済の達率を連想させる。倭国の極南界ということからは、倭国と倭奴国が日本列島にあるとするのは、地形的に、不自然で、朝鮮半島にあったとするのが自然と考える。一方、光武帝が与えた印綬は志賀島で発見されて、国宝に指定され福岡市博物館に収蔵されている金印であるというのが定説である。
次の記事は

安帝永初元年107 倭國王帥升等獻生口百六十人 願請見

安帝の永初元年に倭国王の帥升らは生口百六十人を獻じ、請見を願った。

である。107年の倭国の王は帥升といった。ここでは大倭王ではなく王となっている。これは王に任ぜられることにより、永初元年には倭は中国王朝の冊封体制にはいったことになる。最後の願請見であるが、合う相手は請見とあるから、安帝であろう。この年は安帝の即位年であり、即位の祝賀を意図していたのかもしれない。

桓靈間 倭國大亂 更相攻伐 歷年無主 有一女子各曰卑彌呼 年長不嫁 事鬼神道 能以妖惑衆 于是共立為王

桓帝と靈帝の時代に、倭国に大乱がおき、互いに争った。この間は王がいなかった。卑彌呼という女性は、歳が長けても嫁がず神に仕え、民衆に人気があった。これにより、卑彌呼を王に共立した。

唯有男子一人給飲食，傳辭語。居處宮室

1人の男子が食事を給仕し、語ったことを伝えている。宮室に居住している。

三国志には卑弥呼に関する記事が幾つかあるが、その内、後漢書に書かれているものはこの記事のみである。桓帝の在位期間は147年から167年までで、霊帝の在位期間は168年から189年までである。したがって、147年から189年の間に大乱がおき、その間は王が無かった。卑彌呼が共立された、すなわち、大乱の終わったのは何時であろうか。桓靈間がどこまでかかるかで変わってくる。全体

にかかるとすれば、即位は霊帝の時代で、上限は 167 年、下限は 189 年頃となる。一方桓靈間は倭国大亂にのみかかるとすれば、即位は後漢のあいだということになり、確実な下限は後漢の滅亡の 220 年となる。

自女王国東度海千余里 至拘奴国 雖皆倭種 而不属女王

女王国の東に海を渡り 1,000 里のところに拘奴国がある。皆倭人であるが女王には属していない。

地理的な理解が困難な記事である。

東夷伝の最後は

会稽海外有東鯷人 分為二十余国 又有夷洲及澶洲 傳言秦始皇遣方士徐福将童男女数千人入海 求蓬莱神仙不得 徐福畏誅不敢還 遂止此洲 世世相承 有数万家 人民時至会稽市 会稽東治縣人有入海行遭風 流移至澶洲者 所在絶遠 不可往来

で終わっている。会稽に関連することから、倭条に続けて書かれたのではないか。ここでは倭国との関係が記されていないので、倭条に含まれるとは言えないと考える。

1.3 倭奴国

倭奴国に関しては、印面に 漢委奴国王 かかれた金印が有名である。この金印が保管されている福岡市博物館のホーム・ページ(http://museum.city.fukuoka.jp/) の「金印」では

志賀島の金印は、江戸時代、博多湾に浮かぶ志賀島で農作業中に偶然発見されました。その後、筑前藩主である黒田家に代々伝わり、1978 年に福岡市に寄贈されました。

と書かれている。Wiki「志賀島」には

砂州により本土と陸続きになった陸繋島。全国的にも非常に珍しい。規模は小さいが半島の定義を満たしている。

とある。今では半島となっている糸島も、古くは島であったという。3 世紀ごろは、神武天皇紀に現れる吉備の高島や、島ではないが、難波野崎を連想させる。

福岡辺りが三国志の女王国のうちの奴国であるとの根拠にこの金印がなっているが、本当だろうかという懸念は残る。

1.1 節で述べたピンイン変換からは、委 wěi は 倭 wō より 濊 wèi に近い。楽浪郡の東にある国が濊である。

ここで、固有名詞を倭について考えてみる。始めは、倭人の話を聞いて楽浪郡の官吏が発音の近い漢字を当てた。その後は、倭人が

自ら漢字を当てたことも考えられる。このとき、倭人と官吏双方に方言の差が生じることも考えられる。

漢委奴国王 の読みは、漢の倭国の奴国の王とするのが定説である。他の例から、倭王には王が与えられるのは問題ないが、その下の奴国の王は侯以下が与えられると思われる。また、後漢書では、印綬を与えたとあるが、金印とは指定していない。三国志では、親魏倭王の卑弥呼に金印紫綬を与え、難升米を率善中郎將，牛利を率善校尉とし、銀印青綬を与えたと書かれている。これからは、漢の倭国の奴国の王に与えられるのは銀印青綬であろうと考える。倭国王の朝貢は安帝永初元年 107 であり、建武中元二年 57 年では、委奴国に金印が与えられた可能性はのこる。この場合は奴国の王が大倭王となるのではないか。

金印が委奴国王の住居としてふさわしい遺跡から出土したならば上の説は殆ど史実とすることができるが、出土状況は残念ながらそうではない。倭奴(委奴)の位置が福岡市辺りにとすれば、これは倭の最南端とは到底言えない。

中国の王朝から下賜された印綬は権威を保つ有力なものであり、通常はその国の王居で厳重に保管されるか、王自身が所持するものと考える。とすれば、志賀島付近に倭奴国の王居があったか、志賀島で倭奴国王に遭難や戦死などの不慮の事態が起きた可能性が考えられる。これから次の作業仮説を設定する。

作業仮説 2. 後漢の時代の初期には、倭奴国は朝鮮半島の最南端にあった。その後、倭奴国王は志賀島付近において金印を失うことになった。

倭国に関し、気になる記事が５つ見つかった。これらを挙げていく。初めの３つは、
旧唐書倭国条での、「**倭國者 古倭奴國也**」、日本国条の、

日本國者 倭國之別種也 以其國在日邊 故以日本爲名 或曰 倭國自惡其名不雅 改爲日本 或云 日本舊小國 併倭國之地其人入朝者 多自矜大 不以實對 故中國疑焉
日本国は倭国の別種である。その国が日の上る方にあるために日本という名にした。或いは、倭国の名が雅でないために日本と改めた。さらに、日本は古くは小国であったが、倭国の地を併せたという。その人で入朝したものは、大げさでまじめでないので疑わしい。

と、新唐書の、「**日本 古倭奴也**」 である。隋書では日本は現れないので、唐の時代に日本国と名のったことになる。倭国・倭奴国との関係を使者は唐の担当者に納得のいく説明ができなかった、あるいは、人によって答えが違っていたと考える。

残る２つは、後漢書高句麗条と三国志高句麗条で、

東夷舊語以爲夫餘別種 言語諸事 多與夫餘同 其性氣衣服有異 本有五族 有涓奴部 絕奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部 本涓奴部爲王 稍微弱 今桂婁部代之

東夷の古老は(高句麗は) 夫余の別種という。言語と諸事の多くは夫余と同じであるが、気性や衣服は異なるところがある。本は、涓奴部 絕奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部の五族がいた。また、本は涓奴部の王であったが、いささか弱く、今は桂婁部の王に代わっている。

という記事である。両者ともほぼ同じ内容で、三国志のものを引用した。これからは、高句麗には5族があり、その中から王が擁立された。さらに、五族の名前のうち4つは〇奴であるということである。Wiki「高松塚古墳」では、女子群像の服装は、高句麗古墳の愁撫塚や舞踊塚の壁画の婦人像の服装と相似することが指摘されていると書かれている。こちらは正史をさらに読めば何か得られるかもしれない。両者を疑問としておこう。

疑問 2. 倭國者 古倭奴國也 とはどういうことであろうか。

疑問 3. 高句麗の 〇奴 と 倭奴 とは関係があるのだろうか。

1.4 倭国大乱

後漢書の記事 桓靈間倭国大亂 について考える。桓靈間は 147 年から 189 年である。Wiki の「桓帝」と「霊帝」では

桓帝から霊帝にまたがるのは党錮の禁 159 と、これに続く宦官とこれに反発する勢力との抗争であった。また、184 年には黄巾の乱が始まった。三国志演義はこの黄巾の乱の討伐から話が始まる。さらに、羌や鮮卑といった異民族の侵攻が活発になった。

これからは、桓帝から霊帝の間は、抗争の時代であった。

とある。中国においては、桓靈間は混乱の時代を思わせるものであったのであろう。羌は西方の民族で東夷との直接の接触はない。
Wiki「鮮卑」からは、次を得る。

匈奴が東湖を滅ぼしたとき、その生き残りで鮮卑山に逃れたものの子孫である。安帝 107-125 の時代、鮮卑の大人の燕荔陽が入朝した。朝廷は彼に鮮卑王の印綬を授けた。これ以後、鮮卑は、あるときは反抗し、あるときは降伏し、あるときは匈奴や烏丸と争った。順帝の時代、再び長城の内部に侵入した。

桓帝の時代、檀石槐が大人の位に就くと、南は漢の国境地帯で略奪を働き、北では丁令の南下を阻み、東では夫余を撃退させ、西では烏孫に攻撃をかけた。かつての匈奴の版図を手中に収めた。霊帝の時代になると、彼らは幽州、并州の 2 州で盛んに略奪を行い、国境地帯の諸郡は、鮮卑から酷い損害を受けない年はなかった。

檀石槐に撃退させられた夫余がどうなったかは興味あることである。この当時の夫余は、高句麗の北にいた。撃退させられた夫余の可能性は、

一部はそこに留まり鮮卑の支配下にはいる

高句麗に逃げその支配を受ける

高句麗の東に逃げ、さらに、南下する

などが考えられる。どれかではなく、どれも起きたのではないかと考えている。

東に逃げた先は蓋馬高原が有力な候補と考えている。Wiki「蓋馬高原」では

蓋馬高原は、朝鮮半島北部にある高原地帯である。現在は朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の両江道、咸鏡南道などに属している。広さは 40,000km^2、標高は 1,000m から 2,000m ほどの間で、朝鮮半島最大の高原であり、朝鮮の屋根とも呼ばれる。

白頭山よりも西側に位置し、北は鴨緑江に向かって傾斜しており、赴戦江、長津江、虚川江など鴨緑江の支流が多数走っている。亜寒帯に多いカラマツなどの針葉樹林が覆い、冬の寒さは零下 20 度から 30 度に至るほど厳しい。高原西部では焼畑農業を営み麦、アワ、大豆などを栽培する人々がいた。高原の西方には、狼林山脈が南北に伸びる。

日本統治時代の 1920 年代後半には鴨緑江の支流をせき止めて長津湖、赴戦湖という二大ダム湖が建設された。これらの水は日本海

側にトンネルで引かれ、日本海側の斜面の 1,000m の落差を利用して発電所が建設され、興南に日窒コンツェルンが建設した化学肥料工場など日本海側の咸鏡南道の工業地帯に電力を供給していた。

とある。最後のダムの部分は、古代史とは関係ないが、初めて聞くことであり、水豊ダムと併せて、戦後北朝鮮の発展の礎となったのではないかなど、面白そうなので引用しておいた。

　長白山脈は鉱物資源が豊かな所である。これ以前に匈奴から鉄生産が伝わったと考えられ、鮮卑の強大化には鉄が関係しているかもしれない。(3.匈奴の製鉄炉跡　ホスティング・ボラグ遺跡の発掘 http://www.infokkkna.com/ironroad/2013htm/iron9/1311kyoudo01.htm#3.)
とにかく、鉄生産の技術を持ったと思われる夫余系の民族は、山地に住みついた。冬の寒さは零下 20 度から 30 度に至るほど厳しいことから、さらに夫余は南下したかもしれないことは十分考えられる。蓋馬高原の南は穢が居住していた所である。夫余に押され穢が南下したか、夫余自信が南下したか、あるいは、両者が起きたと思われる。これが倭国大乱の原因のではないかと考える。
　穢は東夷伝では時々顔を出すが、よくわからない民族である。ここで、作業仮説を設定しておく。

作業仮説 3. 倭国大乱の原(遠)因は鮮卑である。

　倭国大乱の時期については、北史で

靈帝光和中 其國亂 ・・・　　靈帝の光和の間で、倭国は・・・

としぼって書かれている。光和は 178 年から 184 年までである。韓条に

靈帝末 韓濊並盛 郡縣不能製 百姓苦亂 多流亡入韓者

　靈帝の時代の終わりに、韓と濊は共に盛んになった。楽浪郡とその県は統制ができなかった。百姓は苦悩し、韓に逃れるものも多かった。

と書かれている。桓靈の間の倭国大乱が影響していることは確かであろう。倭の乱れに対し、難民を受け入れたのか、一部を併合したかが考えられる。どちらにしても、倭が朝鮮半島に居なければ、考えられないことである。

1.5 共立為王

東夷傳で王の共立が記されているのは、今取り挙げている後漢書では、倭条の他に、韓条馬韓項があり、三国志では、夫余条・高句麗条・倭人条があり、倭人条は後漢書と同じものである。

後漢書韓条馬韓項では

馬韓最大 共立其種為辰王 都目支國
馬韓は最大で、その種の人を共立して辰王とした。都は目支国である。

この辰国はたまに出てくるよくわかっていない国である。Wiki「辰国」では

辰国は史記や漢書の朝鮮伝によれば、衛氏朝鮮の時代に現在の朝鮮半島の南部にあったという国である。しかし、後述のように、これは写本のミスによって生まれた錯誤でそもそも実在しなかったという説もある。記録は少なく、その詳細はほとんどわからない。民族系統は不明であり、群小の国々の総称なのか一国の名なのかもわからない。三国志によると三韓の辰韓の前身にあたる国であると見える。しかし極めて資料に乏しい。

と書かれている。とにかくわからないということである。

三国志夫余条では

尉仇台死 簡位居立 無適子 有孽子麻餘 位居死 諸加共立麻餘

尉仇台が死に、簡位居立が立つ。適子はなく、孽子の麻餘がいた。位居が死んだとき、諸加は麻餘を共立した。

諸加について、後漢書では

以六畜名官 有馬加 牛加 狗加 其邑落皆主屬諸加

官名には六畜を用いている。馬加・牛加・狗加がある。村落はどれかの加に属する。

「コトバンク」からは、六畜は 馬・牛・羊・犬・豕・鶏 である。三国志では

皆以六畜名官 有馬加・牛加・豬加・狗加・大使・大使者・使者

六畜をもって官名とした。それらは、馬加 牛加 豬加 狗加 大使 大使者 使者である。

とあり、数が増えている。増えた部分は豬加と家畜の名を付けていない 3 つである。

三国志高句麗条では

伯固死 有二子 長子拔奇 小子伊夷模 拔奇不肖 國人便共立伊夷模爲王

　伯固が死に、・・・国人は伊夷模を共立し、王とした。

である。夫余と高句麗は、摘出長子以外でも共立により王位につくことができたことを示している。

　また、共立ではないが、1.3 節で引用した三国志の記事に王を選出する部族の交代が書かれている。既出であるが再掲する。

本有五族 有涓奴部 絶奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部 本涓奴部爲王稍微弱 今桂婁部代之

　部の交代がどのように行われていたかは書かれていない。後漢書でも 東夷相傳以為伕餘別種 で始まる同様の記事が書かれている。

　時代は数百年下がるが、Wiki「モンゴル帝国」での

**　モンゴリアを統一したテムジンは、1206 年初春、クリルタイ(大集会)において「あまねきモンゴルのカン(王)」に推戴され、チンギス・カンと称した。モンゴル帝国は、モンゴル高原に君臨するモンゴル皇帝(カアン、大ハーン)を中心に、各地に分封されたチンギス・カンの子孫の王族たちが支配する国(ウルス)が集まって形成された連合国家の構造をなした。**

というのも参考になる。このような形態が満州からモンゴルにかけての遊牧民の政治形態であったかもしれない。

次の作業仮説をおくことにする。

作業仮説 4. 倭国は部族連合国家であった。

構成部族が臣下のようにふるまうか、独立国家のようにふるまうかは王家と部族の力関係によるのではないか。

夫余・高句麗に近いものではないか。

2. 三国志の時代（女王国と邪馬壹國）

ここでは、三国志倭人条を主として魏の時代の倭を考える。
まず、Wiki「魏(三国)」から魏の概略を見る。

後漢末霊帝の中平元年 184 に黄巾の乱が起きた後群雄割拠の状態となった。曹操が台頭し、献帝の建安十二年 207 に丞相となった。翌年有名な赤壁の戦いで呉に破れた。建安二十一年 216 に魏王に封じられた。曹操の子の曹丕は献帝から禅譲を受け、黄初元年 220 とした。

この後、司馬懿が台頭し、次男の司馬昭は元帝景元四年 263 に相国・晋公・九錫を下賜された。延康元年(建安二十五年)265 に司馬炎は曹奐より禅譲を受け、(西)晋を建て、泰始元年とした。

東夷に関しては、後漢末期、献帝の永漢元年 189 に公孫度が遼東太守に任じられた後、遼東以遠は公孫氏が領有した。子の公孫康は、建安九年 204 頃に楽浪郡の南部を割いて帯方郡を置いた。その後、景初二年 238 に司馬懿により滅ぼされ、魏の支配するところとなった。

三国志の撰者は西晋の陳寿(233-297)である。東夷伝のうちで成立が最も古く、また倭人に関する情報量は最も多い。ここに、有名な女王国への旅程が記されている。

三国魏の滅亡は 265 年であるから、滅亡後 30 年までに作成されたことになる。現在で言えば、昭和の時代を語るようなもので、陳寿の生きている範囲で、見てきたことを語ることが可能である。こ

れにより、三国志は信憑性が高いとされる。成立状況がこれに近いのは隋書である。隋書では裴清の倭国派遣の記事が書かれている。

三国志は魏書・呉書・蜀書から構成されているが、帝紀があるのは魏書のみで、他の 2 書は列傳のみからなる。これより、陳寿は魏を正統の王朝と考えていたと考えられる。外夷が書かれているのは、魏書烏丸鮮卑東夷傳 1 巻のみである。魏と接触した外夷はこれだけであったということであろう。これも三国の状況を物語っているのかもしれない。これより、引用は魏書烏丸鮮卑東夷傳を省略し「三国志〇条」で行う。

正史の書き方からは、韓条の次には倭条が書かれるはずである。後漢書では 倭在韓東南大海中 で始まり、実際倭条となっている。三国志では 倭人在帯方東南大海之中 で始まり、倭人条となっている。一方、記事からは卑弥呼に倭王を授けている。これからは、倭国が存在したことになる。これを疑問としておく。

疑問 4. 三国志で、韓条の次は倭条のはずだが、何故倭人条か。

漢から魏、魏から晋へは禅譲であったため、魏王朝の記録は殆ど残っていたと推測でき、三国志の作者(たち)はこれらの記録を見ることが出来たと思われる。これが滅亡後 15 年程で完成できたことの一因ではないかとも考える。編集期間が短いことから、執筆にあたって、全ての資料を見ることはできなかった可能性も考えられる。資料は王朝の記録と郡からの報告が考えられる。さらに、帯方郡滅亡時にそこの文書も都まで持ち帰ったことも考えられるが、こ

の可能性は薄いのかもしれない。ここで、倭条の執筆時に、あるいは、校正時に、帯方郡の報告から、女王国への旅程表が見つかったのではないかと思う。

上の考察からは、倭奴国に対する作業仮説 2. と同様のことが倭国に対しても成り立つと推測する。

作業仮説 5. 魏の初期には、倭国は朝鮮半島にあった。その後、魏の時代に、倭王は日本列島に移った。

疑問 5. 朝鮮半島に、倭王の居るところの邪馬台国の候補地をみつけられるか。

倭の移住に関して、イングランド王国のノルマン朝が思い浮かぶ。Wiki「ノルマン朝」では

ノルマン朝は、中世イングランド王国の王朝。1066 年から 1154 年まで続いた。1066 年、フランス王国の諸侯であったノルマンディー公ギヨーム 2 世(ウィリアム)がアングロサクソン人王の支配下にあったイングランド王国を征服し、ウィリアム 1 世として国王に即位したことで成立した。征服王(the Conqueror)と呼ばれるウィリアムがノルマン人の後裔だったため、ノルマン王朝と呼ばれる。征服王朝のため、当初から国王による権力集中が完成していた。ノルマン朝の血筋はその後のイングランド諸王家にも受け継がれている。

中国の征服王朝でも同様であるが、ノルマンディー公がどの程度の規模の軍を率いて征服したかは興味ある。また、文献資料を用いずに、遺跡や遺物などのから、ノルマンディー公の征服を示すことができるかも興味ある。征服後、イギリスとフランスの間では百年戦争 1337-1453 が起きている。

地勢は後漢書と大筋は変わらないので、地図のみを挙げておく。

図 2　三国志の時代

2.1 韓条

韓条の全体的なの考察は後回しにして、倭に関連する興味ある記事を幾つか取り上げる。馬韓について、辰王治月支國 は前章で取り上げた。

桓靈之末 韓濊強盛 郡縣不能制 民多流入韓國

桓靈の末に韓濊は勢力が増し、楽浪郡やその下の県の手に負えなくなった。多くの民が韓国に逃亡した。

倭国大乱は桓靈の間である。倭が弱ったことによる結果か。
辰韓については、

始有六國 稍分爲十二國

始めは 6 ヵ国であったが、その後 12 ヵ国に分かれた

地理的には、南に 6 ヵ国が増えたとするのが自然と思われるが、成り立つのか。

弁韓は、始めに 1 回現れた後、弁辰となっている。卞辰と書かれたものもある。後漢書では、初めから弁辰としている。これも 12 ヵ国である。

弁辰の記述は何か混乱が見られる。区切りの書き出しは次である。

弁辰亦十二國・・・(風俗)(24ヵ国のリスト)**弁辰韓合二十四 其大國四五千家 小國六七百家 總四五萬戸 其十二國屬辰王 辰王常用馬韓人作之 世世相繼 辰王不得自立爲王**

弁辰はまた12カ国である。・・・弁韓と辰韓は合わせて24ヵ国である。大国は4・5千家、小国6・7百家、併せて4・5万戸である。その12国は辰王に属する。辰王は馬韓人から選ばれ、これが代々継がれている。辰王は自ら王となることはできない。

弁辰の話の中に24カ国のリストと **弁辰韓合二十四國** が挿入されている。24ヵ国のリストには、弁辰〇〇国と弁辰が付く国と付かない国が半々である。もともと分かれてあったものを1つにしたかのような気がする。

風俗の中で

國出鐵 韓 濊 倭皆從取之 諸市買皆用鐵 如中國用錢 又以供給二郡

その国は鉄を産出する。韓濊倭はこれを取り求めている。中国の銭のように市場では鉄で買い物をする。楽浪郡と帯方郡にも供給されている。

が目につく。後漢書では、この記事を辰韓の項においている。

鉄を銭として用いるということは、そこそこの生産量はあったが、そんなに多くはなかったのではないかとも考えられる。日本では古代の製鉄遺跡が発掘されている。韓国で製鉄遺跡が見つかれ

ば、そこが辰国か弁辰の候補地となる。現状からは、当面この可能性は低いであろう。

宋書で、倭王の珍は

使持節都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭國王

を望んだが、叙されたのは 安東將軍倭國王 であった。その後も要求を繰り返し、済にいたって

使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東將軍倭國王

に叙された。百済は宋に朝貢していたため、百済を加羅に替えて叙したということを、高等学校のとき、日本史の授業で聞いたような気がする。

百済が認められなかっただけでは情報を正確に伝えていなくて、百済は認められなかったが、百済以外は認められたというのがより正確である。儒教の国が認めたということについては殆ど言及されていなかった。

倭王が要求した国の中で、宋書の時代の国は百済・新羅・任那・倭である。これらの国の範囲は、朝鮮半島からから高句麗の支配地域を除いたものに、倭の支配地域を加えたものである。朝鮮半島の地域は、ほぼ、現在の大韓民国とほぼ一致していると考えている。宋書には新羅条はないが、(前)新羅は成立していたかもしれない。

支配を認めるのはここまで十分と思えるのだが、何故か、慕韓と秦韓２ヵ国も要求している。

慕韓は馬韓で秦韓は辰韓であろう。

（馬：mǎ、慕：mù、辰：chén、秦：qín）

過去の韓の２か国の支配の認可を求めていることになる。これが意味をもつ場合としては、これらの地域の出身者の末裔で朝鮮半島にいない部族を攻略することが考えられる。

ここで、3韓のうちの弁韓あるいは弁辰が抜けている。同じことを認められるまで要請していることから、単に要請しなかったのではなく、要請する必要が無かったと考える。すなわち、馬韓・辰韓以外は倭が支配していたと考える。倭の支配は緩いものであったと考えているから、馬韓・辰韓以外は倭王を盟主とする倭連合を構成する部族がいたというほうがいいのかもしれない。

作業仮説 4. を併せて考えれば、任那と加羅は、倭王が日本列島に移った後も朝鮮半島に留まった部族が造った国家か倭の留守部隊ではないかと思っている。今は憶測に近いが、任那は倭奴国と関連付けられ、百済の替わりに入れられた加羅に邪馬台国があったと考えている。　那：nà、奴：nú、任：rèn、人：rén、日：rì）

これを検討課題の意味で作業仮説としておこう。

作業仮説 6. 後漢から魏にかけて、朝鮮半島南部の国は、馬韓・辰韓・倭であった。倭の移住後、その構成部族の残った国で、国となったものが任那や加羅であった。また、邪馬台国は加羅にあった。

作業仮説 5 と 6 から、弁辰の記述における混乱は次のように説明できる。

三国志の者は、韓条に続き倭条を書き挙げていた。ところが、完成の前に、帯方郡の報告書が見つかったのであろうか、倭は北九州

に移ったことがわかった。しかし、倭の範囲と跡地の状況がわからなかった。倭として扱う予定の朝鮮半島の倭の跡地を弁辰とした。また、女王国への旅の報告書が発見されたので、これを地勢に加えた。

弁辰で鉄が産出していたことは注目される。この鉄が大倭王の経済的基盤ではなかったかと考えている、韓国の範囲で製鉄遺跡が発掘されたという報告を見つけていない。鉄鉱脈の枯渇が北九州への移住の理由ではないかと考えている。日本で、邪馬台国があったとされているところや近江京のあった滋賀県南部には古代の製鉄遺跡が発見されている。

2.2 三国志倭人条の記事

倭人条の記事を見ていこう。初めの地勢の部分は、楽浪郡が帯方郡に代わったこと以外は、後漢書とほぼ同じである。ここに、よく知られている「女王国への旅程」が書かれている。この後風俗についての記述がある。国勢では 自女王國以北 特置一大率 で始まる記事があるが、これは後で触れる。次の記事は

其國本亦以男子爲王 住七八十年 倭國亂 相攻伐暦年 乃共立一女子爲王 名曰卑彌呼 事鬼道 能惑衆 年已長大 無夫婿 有男弟佐治國

その国はもともと男王であったが、七八十年のあいだ倭国では騒乱が続いた。暦年の攻防の後、卑弥呼と呼ばれる女性を共に王とした。鬼道を事とし、衆を惑わした。年は長けているが未婚で、弟が国政を補佐している。

である。後漢書の 桓靈間 倭國大亂 とほぼ同じ内容である。男子が男弟となっている。事鬼道 能惑衆 の意味がよくわからない。コトバンク「鬼道」では

中国において、鬼とは本来死者の霊魂，幽冥の世界における霊的存在を意味し、天界、界を貫く原理法則をそれぞれ天道、人道というのに対して、鬼神の世界を貫く原理法則を鬼道という。また、帝王の主宰する万神の祭壇の八方に設けられる鬼神の通路を文字どおり鬼道と称する。一方、巫覡などの行う呪術および国家非公認の呪術的宗教などもまた鬼道といわれる。後漢末から三国魏の時代にか

けて、四川、陝西両省にまたがる一大宗教王国を築いた五斗米道教団の第3代教主である張魯は、主として符や呪水といった呪術的方法を用いて病人の治療を行い、その勢力を拡大していったが、当時の史書は張魯の教法を鬼道と決めつけている。

この次に、

女王國東渡海千餘里 復有國 皆倭種

女王国東海を渡って1,000里の所に倭人の国がある。

で始まる文が書かれた後、記年記事が始まる。旅程の水行では渡海と書かれていないので、九州の沿海航行といえる。もっとも、関門海峡は渡海といえるか疑わしい。

記年記事の初めは景初二年の記事である。この記事では、月を省略しない。

景初二年238六月 女王遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻 太守劉夏遣吏將送詣京都 其年十二月 詔書報倭女王曰：製詔親魏倭王卑彌呼：帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米 次使都市牛利奉汝所獻・・・今以汝爲親魏倭王 假金印紫綬 裝封付帶方太守假授汝・・・

魏の明帝の景初二年十二月六月、倭の女王卑弥呼は、大夫難升米らを帯方郡によこし、魏の天子に直接あって、朝獻したい、と言ってきた。郡の太守劉夏は、役人を遣わして難升米らを魏の都まで送って行かせた。その年の十二月、魏の女王に返事の詔が出た。親魏

倭王卑弥呼に詔す。：帯方郡の太守劉夏が送りとどけた汝の大夫(正使の)難升米、副使の都市牛利らが、汝の献上品である・・・さて汝を親魏倭王として金印・紫綬を与えよう。封印して帯方郡の太守にことづけ汝に授ける。(倭国伝)

景初二年 238 は司馬懿により公孫氏が滅ぼされた年である。晋書では

宣帝之平公孫氏也 其女王遣使至帯方朝見 其後貢聘不絶

宣帝が公孫氏を平定した。その女王は使いを帯方郡に遣わし朝見した。そのあと朝貢を絶えなかった。

と簡略に書かれている。この公孫氏も面白い存在である。宣帝は「死せる孔明生ける仲達を走らす」で有名な司馬懿仲達である。倭の女王が公孫氏を滅ぼしたことへの祝賀の使いを送ったのではないか。魏王朝、あるいは司馬懿にとって、北方の難敵公孫氏を倒したときに祝賀の朝貢があるのは喜ばしいことであったはずである。朝獻を願ったのは、魏の都にいき、情勢を見極めることを目標としたいたのではないか。6 月に帯方郡に着いた後、12 月に詔勅がでたことになる。この間に必要なことは、都に問い合わせの使いを送り、許可が出た後、都に使いを送ることである。問い合わせは、遼東郡に居たと思われる司馬懿でよかったことは考えられる。

日程に関しては Wiki「司馬懿」に

出征前、明帝に「反乱をどう平らげるか」と聞かれた司馬懿は「往路に100日、復路に100日、戦闘に100日、その他休養などに60日を当てるとして、1年もあれば充分でしょう」と答えており、事実、この通りに軍を動かし、公孫淵を破ったのである。

と書かれている。これは晋書・巻一 帝紀第一 高祖宣帝の景初二年の記事を訳したものと思われる。

この記事からは、洛陽から遼東までの軍の移動に100日かかり、出陣から200日程で公孫氏を討伐したことになる。使いの往来は軍の移動よりも日数は少なかったはずである。6月に使いを派遣したということは、征討が終わった直後か、大勢が決した状況で、祝賀の使節を派遣したということになり、戦況を把握していたと考えられる。

次の記事は

正始元年240太守弓遵遣建中校尉梯俊等奉詔書印綬詣倭國 拜假倭王

帯方郡の太守弓遵は、建忠校尉梯携らを遣わして、詔と印綬を倭国に持っていかせ、倭王に任命した。(倭国伝)

である。景初二年238に叙されたものを倭国に送ったのであろう。半年で詔勅が下りたことを考えると、1年を過ぎているのは少し長い。帯方郡太守の名前は、景初二年は劉夏で正始元年は弓遵となっている。時期的に、弓遵は公孫氏により選ばれたはずである。戦後

処理の一貫として太守の交代が行われたのではないか。さらに、弓遵は赴任にあたって、詔書と印綬を携えていたとすれば、遅くなるのも納得できる。

正始四年 243 倭王復遣使大夫伊聲耆 掖邪狗等八人・・・上獻 掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬

倭王は大夫の伊聲耆掖邪狗ら８人を使いによこした。・・・を献上した

最後の 掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬 は正確には理解していない。掖邪狗に率善中郎將の爵位を与えたとしておく。

正始六年 245 詔賜倭難升米黄幢 付郡假授

詔を発して倭の難升米に、黄色い垂れ幕を、帯方郡の太守の手を通して与えた。（倭国伝）

黄幢は皇帝の軍旗である。おそらく、正始四年に魏に援助を要請し、これに黄幢を与える処置が為されたと考える。「錦の御旗」の効果があったのではないか。

正始八年 247 太守王頎到官 倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和 遣倭載斯 烏越等詣郡説相攻擊状

帯方郡の太守王頎が着任した。倭の女王卑弥呼は、狗奴国の男王卑彌弓呼と以前から仲が合悪かったので、倭の載斯・烏越らを帯方郡に遣わし、お互いに攻めあっている様子をのべさせた。（倭国伝）

帯方郡の太守は、劉夏→弓遵→王頎 と代わったことになる。
正始六年假授された黄幢は王頎の到官までは倭に渡っていなかったのではないか。そこで、新太守に改めて使者を送ったと考える。

遣塞曹掾史張政等因齎詔書 黄幢 拜假難升米爲檄告喩之 卑彌呼以死 大作塚徑百餘歩 徇葬者奴婢百餘人 更立男王 國中不服 更相誅殺 當時殺千餘人 復立卑彌呼宗女壹與 年十三爲王 國中遂定 政等以檄告諭壹與 壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還

帯方郡では、国境守備の属官の張政らを遣わし、彼に託して詔書をと黄色い垂れ幕を持って行かゆかせて、難升米に与え、お触れを書いて卑弥呼を諭した。使者の張政らが到着した時は、卑弥呼はもう死んでいて、大規模に、直系百余歩の塚を作っていた。殉葬した男女の奴隷は、百余人であった。かわって男王を立てたが、国中それに従わず、殺し合いをして、当時数千人が死んだ。そこでまた、卑弥呼の一族で台与という十三歳の少女を立てて王とすると、国がようやく収まった。そこで張政らはお触れを出して台与を諭し、台与は倭の大夫、率善中郎將の掖邪狗ら二十人を遣わして張政らを送って行かせた。(倭国伝)

とある。

張政らを派遣し、詔書と黄幢を渡そうとしたが、卑弥呼は既に死んでいて、塚が造られ、葬儀も行われていた。男王を立てたが治まらず、卑弥呼の宗女の壱与が王となっていた(壹の新体字は壱)。こ

こで、張政は卑弥呼の死について時期や原因を聞くか知らされたと考える。ここで、卑弥呼の死に関して、疑問を設定しておく。

疑問 6. 卑弥呼は何時何処でなくなったのか。

塞曹掾史は帯方郡の官職名である。詔書と黄幢を太守の代わりに届けるのだから、郡ではかなりの高位の役職と考える。Wiki「掾」では

掾は、中国の秦漢代に中央朝廷と地方官署内に設けられた事務処理機構曹の長官である。掾はみな府主(本府の長官)自らが任命を行う。

塞は「漢字ペディア」によれば、「② とりで、要害の地、城塞、要塞」とあり、恐らく、帯方郡の郡衙を指すのではないか。これより、郡衙の管理長官ということになる。

この次の正史の記年記事は、晋書の

文帝作相 263 又數至
文帝が相国ついたにときとその後も数回行われた。

である。

2.3 倭女王卑弥呼

ここでは、疑問 6. を念頭において、卑弥呼について考える。

朝貢の記事は、景初二年 238、正始四年 243 で、これに対する魏の対応が、正始元年 240、正始六年 245、正始八年 247 の記事である。景初二年の最初の朝貢は、前節で考察したように、公孫氏討伐の状況を把握し、即座に対応したことになる。また、この記事から、倭女王に下した詔書で親魏倭王卑弥呼と記していることから、238 年の倭王は卑弥呼であったことになる。

遣使が定期的に行われたものとして、遣唐使と朝鮮通信使が思い浮かぶ。Wiki「遣唐使」からは、630 年から 838 年までの間に 19 回行われた。同じく Wiki「朝鮮通信使」からは、江戸時代には、1607 年から 1811 年の間に 12 回行われた。概算すれば、両者とも期間はほぼ 200 年で、遣唐使は 10 年に 1 回、朝鮮通信使は 20 年弱に 1 回である。使節団の規模は異なるが、魏の時代は 3 世紀前半であることを考慮すれば、三国志のような往来を行うには日本列島から行なうのは難しいと考える。言いかえれば、卑弥呼は朝鮮半島に居た。付随して、倭王の居住する所の邪馬壹国も 238 年には朝鮮半島にあったことになる。

卑弥呼の即位した(共立された)年については、2 つの解釋を考えた。1 つは桓靈間で、もう 1 つは後漢中である。前者では即位年の下限が 189 年となり、後者では即位年の下限は 220 年となる。

死亡時期に関しては、景初二年 238 の記事より、この時の倭王は卑弥呼であることより、死亡年の上限は 238 年である。また、正始

八年 247 の記事では、卑弥呼は既に亡くなっていたことから、下限は 247 年である。正始四年 243 の記事では倭王となっている。これを男王によるものとすれば、下限が 4 年繰り上がり 243 年となる。これらから、次の作業仮説をおく。

作業仮説 7. 卑弥呼は朝鮮半島に居て、238 年から 243 年の間に亡くなった。

即位時の年齢は書かれていない。後漢書では **年長不嫁**、三国志では **年已長大 無夫婿** と書かれていることから、若くても 30 歳、感覚的には 40 歳から 50 歳辺りが妥当ではないかと考える。

桓靈間と後漢中に即位したとして、正始八年 243 まで生きたとして、死亡時の年齢を、即位時 30 歳、40 歳、50 歳についてみれば

	即位年の下限	30	40	50
桓靈間	189	84	94	104
後漢中	220	53	63	73

となる。これからは、桓靈間の即位の可能性は薄いと思われる。後漢の終わりごろに 40 歳辺りで即位したとするのが妥当なところかと考える。この年齢ならば、死亡原因として自然死も十分考えられる。

壱与については、卑弥呼の宗女で、13 歳で即位したと書かれているだけで、考察の手掛かりはない。作業仮説 7 からは、即位は朝鮮

半島で行われたことになる。張政らはお触れを出して壱与を諭したことから、即位後そんなに経っていないのではないか、すなわち、壱与の即位は正始八年 247 直前ではないかと考える。

2.4 女王国への旅程

旅程を考える前に「里」について考察する。
高句麗在遼東之東千里、韓については、方可四千里 というように距離が書かれている場合がある。Wiki「里」では

里は元々は古代中国の周代における面積の単位であり、300歩四方の面積を表していた。後にこの1辺の長さが距離の単位となった。周・漢の1歩は1.3m余りであったと推定され、1里の長さは400mほどであった。古代の軍隊の行軍速度は1日に30里とされた。

と書かれている。この1里＝400mという規準からは、千里は400kmとなる。Google mapで、高句麗の都があったされる鞍山と遼東郡の郡衙があったとされている通化の間を測ると200km程度である。また、韓の方可四千里は1600kmになる。朝鮮半島に1辺1600kmの正方形は描けない。これらから、正史の里程は実測に基づくものではないことは明らかである。3世紀に測量が行われたのも疑わしい。

しかし、実測でなくても、相対的な関係は表しているのではないかと考える。Wikiの「1日に30里」ということから、移動するに要した日数を1日に30里で換算したのではないかと考えた。

なお、30里は12Kmで、京都駅からの鉄道の距離で12Kmに近いのは、東は膳所駅が11.7km、西は神足駅が10.1Kmである。

古代中国の軍隊は(重装)歩兵兵団が主力であったと考える。また、その地形は平地である。高句麗条には 其馬皆小 便登山 とい

う記事がある。高句麗は山道で移動は平地より倍の時間がかかるとすれば、距離は半分になる。

韓の方可四千里についてはどうだろうか。Google Map を見ていると、韓があったとされる朝鮮半島南部は、遼東半島東部よりも、さらに険しい地形と見られる。1 里＝400m からは、1600Km となる。同じく、Google map からは、若干南北に長い矩形と見られなくもない。東西方向は 200Km よりは長く 300Km よりは短く見える。中間をとって 250Km とし、これを規準としておこう。

作業仮説 8. 移動するに要した日数を 1 日に 30 里で換算した。
目安としては、高句麗では半分、韓と倭、4000 里＝250Km、1000 里＝60Km とする。

このうち、韓と倭の部分を「4,000 里＝250Km 説」とよぶことにする。この換算規準では、1 里は 0.06Km となり、少なすぎる。まずは、個々の場合に、適用できるかをチェックも兼ねて、旅程を見ていくことにする。当面は移動に関する部分のみを訳すことにする。

今後、この女王国への旅程を記した記事を「旅程」とよぶことにする。旅程は次の文で始まる。

從郡至倭 循海岸水行 暦韓國 乍南乍東 到其北岸狗邪韓國 七千餘里

(帯方)郡より倭に至るには、海岸にそって船で行き、韓国を南また東に経て倭国の北岸の狗邪韓國に到達する。七千里余りである。

出発地は当然帯方郡の郡衙である。至倭 であるから、倭国への旅程となる。帯方郡の郡衙は屯有県で、現在の黄海北道黄州で大同江下流部の都市で、沙里院市ともいわれている。まず、帯方郡の郡衙から、海岸に沿って船で韓に行く。この後、韓国内を南に行ったり東へ行ったりするという。現在の慶州や釜山のある忠清南道では殆ど東に行くことになることより、韓は京城辺りと考えている。

暦韓國 **到**〇〇は韓国を経て〇〇に至るで、至る先は韓国の外ととるのが自然と思われる。馬韓で挙げられた 50 余国の中に狗邪韓国は含まれていないが、辰韓・弁辰の 24 国のうちに弁辰狗邪国がある。狗邪韓国の１つの解釈は 狗邪韓 という国である。もう１つは韓狗邪国で、韓狗邪国ならば韓の狗邪国となる。三国志では、弁辰は韓の１種であるから、弁辰狗邪国を韓狗邪国とすることはあり得る。狗邪国は三国志で正始八年の記事にある 倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和 に現れる。

ここまでは、経由した国の記載はなく、さらっと書かれている。水行と 暦韓國 の日数が書かれていれば、規準となるのだが、残念ながら書かれていない。恐らく、郡の官吏にとっては朝鮮半島のことはよく知られていたため、書く必要がないと判断されたか、単に倭人条なので、韓のことは書かなかったのかが考えられる。

距離は、前に考察したように、4000 里＝250Km 説を規準すれば、7000 里は 437.5Km となり、京釜線の 441.7Km に近い値になる。

始度一海 千餘里至對馬國 其大官曰卑狗 副曰卑奴母離 所居絶島 方可四百餘里 土地山險 多深林 道路如禽鹿徑 有千餘戸 無良田 食海物自活 乖船南北市糴

初めて海を渡る。千里余りで対馬国に至る。・・・

対馬国は対馬で問題ない。4,000 里＝250Km 説からは、千里は 60Km 強である。Google Map では、釜山と対馬の間は、50Km 程度に見える。

又南渡一海千餘里 名曰瀚海 至一大國 官亦曰卑狗 副曰卑奴母離方可三百里 多竹木叢林 有三千許家 差有田地 耕田猶不足食 亦南北市糴

瀚海という海を南に渡ると、一大国に至る。・・・

一大と壱岐とは漢字としては異なると思われるが、他には考えようがない。釜山と対馬の間と対馬と壱岐の間はほぼ同じである。

又渡一海 千餘里至末盧國 有四千餘戸 濱山海居 草木茂盛 行不見前人 好捕魚鰒 水無深淺 皆沈没取之

また海を渡り、千里余りで末盧国に至る。

末盧国は現在の唐津市辺りか。唐津市の西北部の半島の部分は鎮西町、旧東松浦郡鎮西町であった。秀吉の文禄・慶長の役での名護屋城はこの西よりにある。古代から近世まで朝鮮半島への出入り口

であったと言える。また、加部島・神集島などの島もある。壱岐と唐津の間は壱岐と対馬の間よりやや短い程度である。

東南陸行五百里 到伊都國 官曰爾支副曰泄謨觚 柄渠觚 有千餘戸 世有王 皆統屬女王國 郡使往來常所駐

東南へ陸路500里で伊都国に至る。・・・世々王が治めており皆が女王国に属する。郡使が行くとき常に駐留するところである。・・・

伊都国は現在の糸島市辺りとされている。地図から鎮西町の東になる。4,000里＝250Km説からは500里は30Kmとなる。末盧国を名護屋で、陸行するとすれば、初めは東南方向に出発することになる。名護屋からの直線距離は20Km程に見えるが、道は南に曲がりこんでおり、30Kmに近い。郡使往來常所駐における常からは郡使の往来が複数回あったことになる。正始八年247直後に移ったとして魏の滅亡する265年までに常に駐留することが可能かは少し疑問が残る。

東南至奴國百里 官曰兜馬觚 副曰卑奴母離，有二萬餘戸

東南には百里で奴国に至る。・・・

この奴国は福岡市辺りとするのが通説。福岡市の中津は那の津からきたと言われている。さらに奴の津か。那と奴は同じかどうか。(奴 ：nú、那: nà) 4,000里＝250Km説からは100里は6Kmとなるが、糸島市と福岡市の中心部とは、これよりは長い。Google Map

からは、この間はかなり平坦であることから、同じ日数でも距離は長くなることが考えられる。金印の発見された志賀島が奴国とも考えられるが、どうなのか。糸島半島の東端と志賀島の直線距離は数Km程度に見える。

東行至不彌國百里 官曰多模 副曰卑奴母離 有千餘家

東に行けば、百里で不弥国に至る。・・・

不弥国には有力な比定地はない。伊都国と奴国の間も百里とある。福岡からこの距離にある所としては宗像市が挙げられる。一方、志賀島から数Km程度ならば、博多湾の東端辺りとなる。福岡辺りと考えておけばいいのではないかと考える。

この次は距離が日数で書かれている。

南至投馬國 水行二十日 官曰彌彌 副曰彌彌那利 可五萬餘戸

南に行けば投馬国に至る。船で20日である。・・・

投馬國にも有力な比定地はない。ここからは旅程が里ではなく、日数で書かれている。

南至邪馬壹國 女王之所都 水行十日 陸行一月 官有伊支馬 次曰彌馬升 次曰彌馬獲支 次曰奴佳鞮 可七萬餘戸

南に行けば邪馬壱国に至る。女王のいる都である。船で10日、陸路を1か月である。・・・

続いて

自女王國以北 其戸數道里可得略載 其餘旁國遠絶 不可得詳(次有斯馬國 で始まり、21 国の名）**此女王境界所盡**

女王国から北の国は戸数と里程を載せることは可能であるが、その他の国は遠く離れており詳しく知ることはできない。(21 国の名）これが女王国の境界である。

さらに、

其南有狗奴國 男子爲王 其官有狗古智卑狗 不屬女王 自郡至女王國萬二千餘里

その南には狗奴国がある。男王で、その官に狗古智卑狗があり、女王国には属さない。帯方郡より女王国には 1 万 2000 里程である。

と書かれている。狗奴国は今のところ不明である。日本書紀からは、南にある国は熊襲である。

末盧国からの旅程を図に示す

陸行 500 里　　100 里　　100 里　　（方向は東南）

末盧国　→　伊都国　→　奴國　→　不弥国

南至投馬國 水行 20 日　　南至邪馬壹國 水行 10 日 陸行 1 月

図 3　各国間の距離

地図は次である。

図 4　旅程に現れる国

水行について考える。旅程の始めは、水行し、韓の中を陸行していた。水行 10 日でどの程度進むのか。魏の時代に呉との戦いから海運が発達した。これは帯方郡から韓と倭にも伝わったはずであ

る。これも倭の移住の要因となったことも考えられる。船の航海が可能ならば、陸路より海路のほうが盗賊に関しては安全である。

古代船の復元と航行に関しては幾つかの web site で報告されている。古代船の復元に関しては、「科学する邪馬壹國 古代の船と航海ルート」url は http://inoues.net/science/war.html が参考になるが、航行に関しては平均巡航速度が報告されているだけである。また、管理者の死去により現在では閉鎖された web site であるが「日韓古代文化研究会・野生号」という記事を見つけた。ここから、興味ある部分を抜き出す。

野生号は、1975 年 6 月 20 日に仁川を出航し、魏志倭人伝の記述通りに半島の西海岸と南海岸の多島海航海し、7 月 17 日に狗邪韓国があった付近の釜山に到着している。そして、7 月 21 日に釜山港を出発し、対馬、壱岐を経由して 8 月 1 日に呼子に到着、その後唐津、博多を経て 8 月 5 日に志賀島で航海を終えている。実に 45 日間におよぶ船旅だった。

この記事からは、呼子(唐津市、唐津と名護屋の間)と志賀島の間を 4 日かかったことになる。Google 地図での目測では、直線距離で 40Km ほどである。これを基準とすれば、水行十日で進める距離は 100Kmh ほどとなる。

Wiki「邪馬台国」から、実際の旅程も三国志の記述のようであったとする説(連続説)と、不弥国までは距離が里で書かれているが、

投馬国と邪馬台国は日数で書かれていることに着目して、伊都国を起点として、奴国・不弥国、投馬国、邪馬台国が放射状に書かれているとする説(放射説)がある。放射説には幾つかのヴァリエーションがあるようだ。

距離の書き方は、末盧国までは度一海千余里。末盧国から伊都国は東南陸行五百里と書かれているが、その先の不弥国までは東南至〇〇国百里と書かれている。さらに、この後は日数で水行二十日と水行十日陸行一月と書かれている。
これと郡使往來常所駐と合わせれば、伊都国から先は聞いた話と考えられる。

野生号の記事から、水行十日は 100Kmh ほどと推測した。これから、水行二十日は 200Km ほどとなる。陸行については、「里」でみた、1 日 30 里を基にする。作業仮説 8 では短すぎるので、1 里＝12Km では陸行一月は 360Km となる。遼東郡と高句麗の間はこの半分であった。地勢を考慮すれば、さらに半分の 100Km 程度となるが道が曲がりくねっていることを考慮すれば、さらにその半分程度の 50Km も考えられる。

不弥国と伊都国から、それぞれ、直列的に行く場合と並列的に行く場合を考えてみる。
不弥国＝宗像市とする。九州の東海岸を沿って 50Km の地点は北九州の東部辺りが近い。さらに、九州で海岸線に沿って、50Km 地点を考えれば、宇佐から国東半島の付け根辺りとなる。同様に、宇佐

から100Kmは臼杵辺り、さらに100Kmは延岡か日向辺りとなる。中国をとれば、100Kmは宇部辺りとなる。荷物を積んでいることを考慮すれば、もう少し短くなる。

伊都国＝糸島市とし、海岸線を100Km地点は伊万里か佐世保。佐世保から100Kmは天草周辺で、この後陸行することを考えれば、宇土半島が浮かんでくる。糸島市から熊本県の海岸に行くならば、陸路で南下するほうが可能性が高いのではないかとも考えられる。

旅程には官名と戸数が書かれている。これらを表にしておく。

表１　女王国の官名

国		官	副官		
對馬國	千余戸	卑狗	卑奴母離	（官は大官）	
一大國	三千許家	卑狗	卑奴母離		
末盧國	四千余戸				
伊都國	千余戸	爾支	泄謨觚・柄渠觚		
奴國	二万余戸	兜馬觚	卑奴母離		
不彌國	千余家	多模	卑奴母離		
投馬國	五万余戸	彌彌	彌彌那利		
邪馬壹國	七万余戸	伊支馬	彌馬升	彌馬獲支	奴佳鞮

現在、この表からは何も得られていない。伊都国が 郡使往來常所駐 とあるのに、戸数が少ないのは若干奇異に感じる。

2.5 自女王國以北

風俗・国勢の終わりのほうに次の記事がある。

自女王國以北 特置一大率 檢察 諸國 諸國畏憚之 常治伊都國 於國中有如刺史

女王国より北に特に大率を一人おき、諸国を検察する。諸国は畏れ憚っている。大率は常に伊都国で収めている。まるで中国の刺史のようである。

一大率は一人の大率と解釈した。大率は(時代が下がるが)百済で佐平に次ぐ官位の達率と同じ由来など何か関係があるのではないかと考えている。後漢書の大夫も同様である。ピンイン変換では、

大夫：dà fū、大率：dà lǜ、達率：dá lǜ である。

常治の治は馬韓のところの「治月支国」と同じ用法か。旅程記事からは、伊都国には王と長官・副官がいた。この文から大率はその上の存在である。大率が王を兼ねた可能性は低く、伊都国の国衙の他に大率府みたいなものを造ったのではないかと考える。徳川時代の二条城と大阪城を兼ねたようなものを想っている。

この記事と旅程の記事に書かれていた

自女王國以北 其戸數道里可得略載 其餘旁國遠絶 不可得詳（次有斯馬國で始まり、21 国の名）此女王境界所盡 其南有狗奴國 男子爲王 其官有狗古智卑狗 不屬女王

を合わせて考えてみよう。

ここまでに書かれている女王国は図 3・4、表 1 の国々である。

〇〇以北は、〇〇を含むことになっているが、これでは **特置一大率** の解釋と合わなくなる。ここでは、**自女王国以北** は、女王国に属さない北の国という意味と解釈する。

自女王国以北 がかかるのが、此女王境界所盡 までと、不可得詳までとの 2 つが考えられる。

前者の場合は、女王国の北に国が幾つかあるが、詳細はわからない。その他に名前を挙げた 21 カ国があり、これが女王国の境界となる。この場合、21 カ国は北ではない。東(南)は不弥国できっているので、無いとしたい。同様に西も無いとすれば、南が残り、21 カ国は南の境界となる。博多辺りから南で、21 カ国が存在し得る地域としては、筑後川流域が考えられる。この場合の水行は西岸に沿うことになる。

後者の場合は、女王国の北に、女王国に属さず詳細はわからないが、名前を挙げた 21 カ国があるとすると、**此女王境界所盡** がおかしいことになるが、これを無視して採用するのも魅力的である。この場合は、21 カ国は女王国の北にあることになり、北九州とその周辺が有力となる。博多辺りから北九州に向かうには、始めは北に行くことになる。また、この場合の水行は東岸の可能性が高い。

この旅程の書かれた時期は北九州に移ってそんなに時間が経っていないはずである。末盧国から不弥国を先ず制圧して、帯方郡の高官を留めることができるように統治するとともに、21 カ国を支配下においた。このとき、魏から下賜された詔書と黄幢が役に立ったことは十分考えられる。征服先、すなわち、倭王の居る所としての邪馬台国はこの 21 カ国の先となる。21 カ国が北九州とすれば、大分県辺りが考えられ、21 カ国が筑後川辺りとすれば、菊池川辺りが有力となる。

印象として、九州移住の前線基地から、九州攻略の後背基地となった気がする。信長の近畿攻略における岐阜城のようなものではないか。信長の居城は 那古野城→清州→岐阜→安土→(?) と移った。さらに、大阪も視野に入っていたようである。

Wiki「糸島半島」では

糸島半島は福岡県北西部、玄界灘に突出した半島である。福岡市西区今宿と糸島市加布里を境界にして、突出した部分を指す。瑞梅寺川や雷山川の堆積物によって、北部の島嶼部分と南部の雷山山塊がつながったものである。元岡遺跡群(弥生中期以降)からは製鉄炉が密集する大規模な製鉄遺構や、大宝元年 701 の年号が書かれた木簡、珍しいヒョウタン形土器などが出土している。

加羅の地と推定されている所には伽耶山がある。実際には、伽耶山の近くに加羅があったと推測している。伊都国の跡と言われている糸島市には可也山がある。この糸島はもともとは水路により分離された島であったという。

京城、夫余、慶州なども山城の建築が可能な山に接していて、宮殿は下の平地に建造されている。日本でも、飛鳥には高取山(城)、藤原京には耳成山があるように、邪馬台国が関係するところは単独峰が見られる。これは防御のための山城を造るためか。あるいは、単独峰が近くにないと落ち着かないのか。

興味をもっている web site の１つに「和鉄の道・Iron Road」ある。url は https://www.infokkkna.com/ironroad/start.htm

このサイトは古代を含む製鉄遺跡を踏査し、関連する資料の収集と考察、さらに、シンポジウムの聴講記録からなる。現時点では一部の流し読み程度であるが、福岡 元岡製鉄遺跡群や菊池川・大野川の製鉄遺跡等が取り挙げられている。この菊池川流域とその北の八女・久留米には装飾古墳が数多く存在する。

いずれ、ここで取り上げられている遺跡や内容を検討し、取り入れたいと想っている。

ここで次の作業仮説をおく。

作業仮説 9. 三国魏の終わり頃(3 世紀後半)には、女王の都（すなわち、邪馬台国）菊池川・大野川辺りにあった。その後、豊の国が九州の最後の拠点となった。

正始八年の記事に現れる塞曹掾史張政は張騫?-BC135}の子孫で、旅程の記事は張政が書いたのではないかということを思いついた。これは本稿には影響がなく、「そうであったなら面白い」程度である。Wiki「張騫」から抜き出す。

張騫?-BC114は中国前漢代の政治家、外交官。字は子文。漢中郡の出身。

武帝の命により匈奴に対する同盟を説くために大月氏へと赴き、漢に西域の情報をもたらした。当時の漢では大月氏に対して、対匈奴の同盟を説く使者を募集しており張騫はこれに自薦して見事に選ばれた。同盟こそならなかったものの張騫が持ち帰った西域の知識は極めて貴重なものであり、それまで漢にとって全くと言って良いほど状況が解らなかった西域が、これ以降は漢の対匈奴戦略の視野に入ってくることになる。この功績により太中大夫とされる。紀元前121年の遠征の際に期日に遅れた罪で死罪となる所を金銭で贖って庶民に落とされる。

張騫の孫の張猛は匈奴の呼韓邪単于と盟を結び、また一時期元帝BC48-BC33に信任された。

また、Wiki「月氏」からは

張騫が大月氏国にたどり着いた、時の大月氏王はかつて匈奴に殺された先代王の夫人で、女王であった。大月氏女王は張騫の要件を聞いたが、すでに復讐の心は無く、国家は安泰しており、漢が遠い国であるため、同盟を組むことはなかった。

である。

張騫の死後350年、その孫の張猛から280年程の差がある。死罪を免れるほどの蓄財ができたのは、経験を生かして、西方貿易にか

かわっていたと考えられる。子孫もこれを引き継ぎ、張騫のように官吏になったものもいたことも考えられる。張政が張騫の子孫の可能性が全く無いとは言い切れない。

　先祖の業績に倣い、呉の東に居ると思われる倭の勢力を調べたというのは面白い話であり、たどり着いた先は女王が支配しており、ともに同盟を結び匈奴・呉を攻めるという目標は達成できなかったという結果も同じである。

3. 晋書の時代

晋書は648年に唐の太宗の命により、房玄齢・李延寿らによって編纂された。Wiki 「晋(王朝)」によれば

晋265-420は、中国の王朝の一つ。司馬炎が魏最後の元帝から禅譲を受けて建国した。280年に呉を滅ぼして三国時代を終焉させ、通常は匈奴(前趙)に華北を奪われ一旦滅亡するも、南遷した317年以前を西晋、以後を東晋と呼び分けているが、西晋、東晋とも単に、晋、晋朝を称していた。東晋時代の華北は五胡十六国時代とも称される。首都は洛陽、西晋末期に長安に遷った後、南遷後の首都は建康(南京)。宋により滅ぼされた。

晋書の扱う範囲は265年から420年までで、謎の四世紀と呼ばれている時代は完全に含まれ、同じく謎とされている五世紀も一部が含まれる。

3.1　晋書の記事

晋書では外夷は四夷傳1巻に書かれている。晋の成立時には、まだ呉の征討は終わってなく、北方では鮮卑系諸部族が支配していた。また、統一後は内紛が続いたため、東夷の朝貢が少なかったのではないか。倭についてはそんなに長くはなく簡単なものである。

四夷伝で扱われている東夷の国は順に夫余国・馬韓・辰韓・弁韓・肅慎氏・倭人・裨離で、高句麗が取り挙げられていない。これ

は、高句麗の朝貢がなかったからではないかと思っている。何故朝貢がなかったかは興味がある。313 年に楽浪郡と帯方郡は高句麗により滅ばされた。恐らく、その領有するところとなった。

辰韓条に弁辰がかかれ、

皆屬於辰韓 辰韓常用馬韓人作主 雖世世相承 而不得自立

皆は辰韓に属する。辰韓は馬韓人から主をつくる。代々受け継がれているが、自立できない。

と書かれている。三国志では弁辰は辰王に属するとしている。馬韓・辰韓・弁韓は晋書以降の正史には登場しない。

倭は倭人となっている。状況は魏と殆ど同じということだろうか。風俗などは後漢書よりも簡略な三国志のダイジェストのように見える。

百済は四夷伝では取り挙げられていないが、簡文帝紀に

東晋簡文帝咸安二年 372 正月 百濟 林邑王各遣使貢方物
六月 遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍 領樂浪太守

正月 百濟と林邑の王は夫々朝貢した。

六月 使いを送り、百濟王の餘句を鎮東將軍領樂浪太守に叙した。

の 2 つの記事がある。これが正史における百済の初出である。領樂浪太守という官名は初出である。王ではなく領〇〇太守というの

は、晋の事情であろう。とにかく、この時点で、百済は楽浪郡の地にあった。百済が漢城(現在の京城)にあったとすれば、楽浪太守でなく帯方太守のほうがふさわしいと思える。この記事が四夷伝ではなく**帝紀**にかかれているのもまた興味ある問題である。ここで、疑問を設定しておく。

疑問 7. 晋書で高句麗条がないのは何故か。また、百済が四夷伝ではなく帝紀に書かれているのは何故か。

晋書で、倭条の記年記事は

宣帝之平公孫氏 238 也 其女王遣使至帶方朝見 其後貢聘不絶 及文帝作相 263 又數至

宣帝が公孫氏を平定するや、その女王は帯方郡に使いを送り朝見した。その後も朝貢は続いた。文帝が相国についたときとその後も数回行われた。

と

泰始初 265 遣使重譯入貢　　重ねて朝貢した。

の 2 つである。238 年は景初 2 年で、文帝は司馬昭である。247 年には倭の王は壱与になっていたから、263 年以降の朝貢は壱与によるものである。263 年以降の数回に泰始初年入っているかはわからないが、泰始初年は武帝司馬炎が晋朝を開いた年である。宣帝司馬

懿が公孫氏を征討した景初二年、文帝司馬昭が相国についたときと3代続いて(祝賀の)朝貢を行っている。遼東郡以東を支配していた公孫氏を征討したことによる対応とだろうが、当年に遣使できるのは、朝鮮半島にいなければできなかったと考える。また、この2つの記事からは、泰始初年265は女王であった。作業仮説7とあわせれば、この時の女王は壱与となる。

この後は安帝紀の記事

義熙九年413高句麗 倭國及西南夷銅頭大師並獻方物
高句麗と倭国と西南夷の銅頭大師が方物を献じた

までの157年間、正史には倭の記事がない。なお、義熙は東晋の安帝397-418時代の最後の元号である。この記事は、南史の

晉安帝時有倭王贊遣使朝貢
晉の安帝のとき、倭王の贊が朝貢した。

は同じとおもわれ、義熙九年413に朝貢した王の名は讃となる。

百済と同じように、東夷〇〇国の朝貢も、四夷伝ではなく、帝紀に書かれている。四夷伝には馬韓と辰韓の朝貢も書かれているため、この東夷〇〇国は馬韓と辰韓とは異なるとするのが自然である。

これを疑問として設定しておく。これは疑問７と共通するかもしれない。

疑問 8. 東夷〇〇国の朝貢は何故帝紀に書かれているのか。

晋書の帝紀に書かれている東夷〇〇国の朝貢の年を表にした。併せて馬韓と辰韓の朝貢の年も記入した。〇〇には数字がはいる。これは朝貢ごとに国の数が異なっているため書いておいた。

表 2　東夷〇〇国 の朝貢

年	泰始初年 265	咸甯二 276正月	六月	三年 277	四年 278正月	是歳	太康元年 280六月	七月
東夷〇〇国	倭人	八	十七	三	六	九	十	二十
馬韓							〇	
辰韓							〇	

年	二年 281二月	六月	三年282	七年 286正月	八月	是歳	八年287	九年288
東夷〇〇国	五	五	二十九	十一	十一	十一	二	七
馬韓	〇					〇	〇	
辰韓	〇					〇		

年	十年 289五月	是歳	太熙元年 290	恵帝永平 元年291	孝武帝大元 七年382
東夷〇〇国	十一	三十	七	十七	五
馬韓	〇		〇		

後漢書・三国志には韓の国の朝貢は、

建武二十年 44 韓人廉斯人嚇/甦/蘇馬諟等 詣樂浪貢獻

韓人の廉斯人蘇馬らが楽浪郡に朝貢した。

のみである。楽浪郡が近いため、郡の直接の統制を受けていたのかもしれない。

晋書では、太康元年 280 から太熙元年 290 までの 11 年間に、馬韓は 6 回、辰韓は 3 回の朝貢が記録されている。また、初めの朝貢した年には東夷〇〇国も朝貢している。

弁辰は辰韓条の中に 又有弁辰 亦十二國 合四五戸 各有渠帥 皆屬於辰韓 の文が挿入されていると解釈した。ここでも三国志と同様に、弁辰の扱いが普通ではない。

東夷〇〇国の最初の朝貢は咸甯二年 276 で泰始初年 265 の 11 年後のことである。恵帝の永平元年 291 までの西晋の時代で、27 年間に 20 回行われている。1 年に 0.75 回である。1 年に 1 回といってもそれ程言い過ぎではないだろう、帯方郡の郡衙に行ったとしても離れていては難しい。楽浪郡も考えられるが、北には高句麗がある。楽浪郡の東北からは、地図から見るに、道が険しく、これも困難だろう。残るは韓の南の倭の地で、 作業仮説 4，5 からは、倭の構成部族で残った部族と考える。

倭王と幾つかの構成部族が移住した後、後漢書でいう大王となる国が現れなかったため、帯方郡に使いを送り晋に朝貢して、後ろ盾としたのではないか。さらには、景初二年 238 の記事で、は倭王の

他に、恐らく正使の難升米は率善中郎將、副使の牛利は率善校尉に叙された。彼らは、倭王直属の高官か、構成部族の首長か彼に近いひとであったであろう。朝貢の目標では下賜品と爵位を得ることか、帯方郡太守に紛争の仲裁をもとめたかが考えられる。回数が多く、年に複数回行われているも結果を聞くためではないかと考える。永平元年 291 で何故途絶えるのかについては、百済と新羅が関係していると想っているが確信にはなっていない。

3.2　壱与と台与

三国志から、倭の王は 男王 → 卑弥呼 → 男王 → 壱与 となっている。Wiki「台与」では

壹與：三国志魏書東夷傳の倭人之条、(通称魏志倭人伝、陳寿編纂、3 世紀・晋代)では 2 写本系統とも壹與と記載されている。発音は `い(ゐ)よ’か?。新字体では壱与。
臺與：梁書諸夷伝 倭(姚思廉編纂、636 年・唐代)、北史四夷伝(李延寿編纂・唐代)などに記述。新字体では台与。

と書かれている。三国志では既に見たように 復立卑彌呼宗女壹與・・・である。梁書では次のように記されている。

復立卑彌呼宗女臺與爲王 其後復立男王 並受中國爵命 晉安帝時 有倭王贊 贊死 立弟彌 彌死 立子濟 濟死 立子興 興死 立弟武 齊建元中 除武持節督倭新羅任那伽羅秦韓慕韓六國諸軍事鎮東大將軍 高祖卽位 進武號征東將軍

壹與と臺與は同一人でとするのが定説である。表記の差については、中国語の発音に求めているものから、単なる書き間違いなどの考察が為されている。正史の記事からは、同じ人とみるのが自然と考える。

字と発音が異なるのだから、壹與と臺與は別人と考え、同じという積極的な理由がみつからない限り同じ人としないのも、また自然である。この別人とする考えは、いまのところ、見た記憶がない。

三国志の時の(資料では)女王は壹與であったが、梁書の時の(資料では)女王は臺與といった。すなわち、女王が 2 人いたという考えである。この立場からは倭の王は

男王 → 卑弥呼 → 男王 → 壱与 → 台与 → 男王 ・・・
→ 讃で始まる五王

と替わったことになる。さらに、壱与は伊予を、台与は豊を連想させ、東遷のイメージが変わってくるが、こちらのほうが面白い。

ここで、次の疑問が生じる。

疑問 9. 三国志の倭と宋書の倭とは同じ王朝か。

正史から得られるのは以上である。これが、謎の四世紀・五世紀と名付けられた由来である。三国志には倭の記事が数多くみられるが、戦闘や通行の記事で、倭の王名は書かれていない。

この時代の倭(日本)を扱った正史は、日本書紀のみである。したがって、できるかどうかは別にして、日本書紀から何かきっかけを探していくことしか方法がないと考える。

日本書紀に現れ、よく知られている女性としては、神功皇后、推古天皇、持統天皇が挙げられる。この他に、天照大神も挙げられるが、女神は女性かどうか。天照大神は神代巻上に書かれているが、神代は記年記事がないことと、文章が難しいことから、神代上下は扱わないことにする。天の岩戸の話は 卑弥呼 → 男王 → 壱与 を想起させる。この他では、飯豊皇女が挙げられる。

Wiki「日本神話」では、

日本神話と呼ばれる伝承はほとんどが、古事記・日本書紀、および、各風土記の記述による。そのため高天原の神々が中心となっているが、出典となる文献は限られる。また、地方の神社や地方誌の中にも上記三つの文献には見られない伝承を残している。

と書かれている。これからは、日本神話は官製のもの、あるいは、官の認めたものということができる。

日本書紀は720年に完成した。作成の意図はこの頃には確定していた日本という国を、天皇を首長とする国家体制が古くから存在し、各貴族の祖先をその体制に位置付けることであったという。卑弥呼の時代は紀作成時から500年ほど前のことで、日本の成立はその100年から200年の間のことである。今では、この四・五世紀に蓋をすることが目標ではないかと想っている。謎の四世紀・五世紀と言われているように、この目標は十二分に達成されていといえる。日本書紀の編纂時から見ての四・五世紀は、現在から見れば、

ほぼ戦国時代から江戸幕府成立時である。旧家では、先祖は何々の戦いで功績を挙げた等は未だに言い伝えられている。しかし、それが少々変わろうとも、あるいは、おかしいと言われてもあまり問題とはならないであろう。

記の成立時において、かなりの豪族はその先祖が朝鮮半島から女王に率いられて九州の玄界灘や中国地方の日本海側に移住し、近畿地方に移ったということが伝承されていたとも考えられる。先祖が女王に率いられて日本列島に移住したと言い伝えられている豪族もかなりいたのではないか。このような場合、伝わるのは大まかなことであり、断片的である。細部はほとんど伝わらず、それが現状に殆ど影響しなければ、異論をはさむ人はいないであろう。

今のところ、先祖に関して伝承されたもののうち、年代を付けた記事としては困るものを説話風にしたものが神代上下ではないかと考えている。

この困るもの、あるいは、蓋をしたいものはなんだろうか。四・五世紀に東遷が行われたことと、倭は部族連合国家であったことではないかと考える。

3.3　神功皇后紀　魏志云

前節で述べた発想に従って、日本書紀を眺めていくことが目標となる。本格的に取り組むには、東夷伝の他の東夷の概略、三国史記の概要などを把握しておくことが有益と考える。

日本書紀で神功皇后紀が目につく。それは、天皇でない人に１巻が割り当てられているということである。年紀は仲哀天皇〇〇年で始まり、仲哀天皇の葬儀後、皇太后となり、摂政元年とすると記されている。そうならば、神功皇太后紀でもよいのではないか。あるいは、大月氏にあるように、皇太后が政治を摂る制度があったのではないかとも考えさせられるなど幾つかの疑問が湧いてくる。

ここでは、神功皇后紀にある

卅九年 是年也 太歳己未 魏志云 明帝景初三年 239 六月 倭女王遣大夫難斗米等 詣郡 求詣天子朝獻 太守鄧夏遣吏將送詣京都也

この年が魏志のいう明帝景初三年六月で・・・

という記事を考えてみる。これは、三国志では景初二年 238 の記事である。さらに、

四十年 魏志云 正始元年 遣建忠校尉梯携等 奉詔書印綬 詣倭國也

魏志のいう正始元年で、・・・

がある。正始元年は 240 年で、この記事の記年は三国志と一致している。さらに「空企画」とも一致している。同様の記事は、四十三年 魏志云 正始四年 243 と 六十六年 是年 晉武帝泰初二年 266 の 2 つの記事がある。後者は、晋書では泰始初年となっている。

何故ここで魏志を引用するのかという疑問をまず抱くことである。さらに考えれば、これらの記事を取り去っても、神功皇后紀としては、他を修正する必要はない。ということは、日本書紀の著者は、何らかの理由により、あるいは、何らかの意図をもって、これらの記事を引用しここに置いたということになる。少なくとも、神功皇后から、卑弥呼を想起させたいとうことは間違いないであろう。しかし、引用しているのは朝貢したという記録のみである。三国志で最も内容のある正始八年 247 の記事が引用されていない。これより、内容的に意味のある部分は紀には引用されていず、卑弥呼と壱与に関する具体的なことは知られたくなかったと言える。これより、記年が一致していてきりのよい四十年の記事から次の作業仮説をおく。

作業仮説 10. 神功皇后四十年は魏の正始元年で、西暦は 240 年である。元年は 201 年となる。

また、これより大きな問題が発生する。すなわち、作業仮説 7 では卑弥呼は 243 年までに亡くなっている。これからは、神功皇后四十三年以降は卑弥呼はいなかったことになる。三国志では、卑弥呼男王が立ったが、国が乱れた為、宗女の壱与を共立した。天岩戸の

話は、これを説話風にしたもののように思える。すなわち、卑弥呼と壱与(さらに、あるいは、台与)の事跡を神功皇后とし、祖先としての神格的部分を天照大御神としたのではないかと考える。これを作業仮説としておく。

作業仮説 11. 卑弥呼と壱与の事跡が神功皇后紀となり、神格的部分と九州への移住が天照大御神となった。

男王については何も書かれていない。出自ににによっては王朝の交替にもなり得る。

神功皇后紀には、百済の王の即位と死亡の記事が書かれている。訳を付けずにこれらを列挙する。なお、作業仮説 10 から算出した西暦を付け足した。

五十五年 255 百濟肖古王薨
五十六年 256 百濟王子貴須立爲王
六十四年 264 百濟國貴須王薨 王子枕流王立爲王
六十五年 265 百濟枕流王薨 王子阿花年少 叔父辰斯奪立爲王

Wiki の百済の各王の項目から在位期間を抜き出していく。

肖古王の在位期間は 166 年から 214 年である。

貴須王を仇首王とすれば、在位期間は 214 年から 234 年である。

枕流王はわからない。流の付く王は仇首王子の子に沙伴王、比流王がいるが、第 7 代沙伴王は 234 年に即位、第 11 代比流王は 304 年に即位したとされている。

辰斯王の在位期間は 385 年から 392 年である。
阿花王と思われる阿莘王の在位期間は 392 年から 405 年である。

これからは、肖古王の没年の 214 年から辰斯王の即位した 385 年までは 169 年となる。肖古王の没年を神功皇后五十五年 255 としても辰斯王の即位した 385 年までは 130 年となる。肖古王・仇首王を近肖古王・近仇首王としてみる。

近肖古王の在位期間は 346 年から 375 年で、
近仇首王の在位期間は 375 年から 384 年である。

この近仇首王から辰斯王・阿花(莘)王へは、連続して繋がる。近仇首王の没年の 375 年から辰斯王の即位した 385 年までは 10 年となり、神功皇后紀の 10 年と同じになる。しかし、辰斯王の即位した 385 年を神功皇后六十五年 265 とすれば、120 年のギャップが生じる。
応神天皇紀でも百済の王について触れている。神功皇后紀と同様にこれらを抜き出す。

三年 272 是歲百濟辰斯王立
十六年 285 是歲 百濟阿花王薨
廿五年 294 百濟直支王薨 即子久爾辛立爲王

阿花(莘)王の在位期間は 392 年から 405 年である。百済の王統から直支王は腆支王と考える。腆支王の在位期間は 405 年から 420 年で、没年の差は 126 年である。宋書では

義熙十二年 416 以百濟王餘映為使持節 都督百濟諸軍事 鎮東將軍百濟王

百濟王の餘映を使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王とした。

百済本紀では

十二年 416 東晉安帝遣使 冊命王爲使持節都督百濟諸軍事鎭東將軍百濟王

東晉の安帝に使を派遣した。使持節都督百濟諸軍事鎭東將軍百濟王に冊封された。

があり、対応している。Wiki「腆支王」からは、腆支王は百済の第 18 代の王で在位期間は 405 年から 420 年である。先代の阿莘王の長男。梁書では余映、日本書紀では直支王と記される。これから、次の作業仮説を得る。

作業仮説 12. 応神天皇廿五年は百済の腆支王十六年で、420 年である。元年は 396 年となる。

「空企画」での即位年 270 年より、126 年遅いことになる。また、卑弥呼の卒年の下限 247 年からは、170 年程の差となる。

これからは解決すべき問題が 2 つ生じる。これらを課題としておこう。

課題 1. 神功皇后との間が 130 年程空くことになる。逆に言えば、神功皇后＝卑弥呼＋壱与(・台与)の卑弥呼以後 130 年余りが隠されたことになる。この隠されたものは何か。

課題 2. 応神天皇以降で、天皇の在位期間の合計が 136 年短くなることになる。本稿の立場からは遣隋使が派遣された 600 年以降は信用できるとする。「空企画」の応神天皇の即位年の 270 年から 600 までの 330 年を 200 年に縮めることができるかということである。

3.4　課題に対するイメージ

課題ついて考える前に、240 年以後の倭の状況を考えてみよう。

作業仮説 7 から、卑弥呼は 238 年から 243 年の間に亡くなった。また、正始八年 247 の記事から、壱与の即位はその直前と考えた。卑弥呼と壱与の間に男王がいたことから、もう少し下がるかもしれないが、これ以上は取っ掛かりが見つかっていない。この後、泰始初年 265 から安帝の義熙九年 413 年まで、朝貢の記事は無い。

この間に、東夷〇〇国の最初の朝貢は咸甯二年 276 から恵帝の永平元年 291 までの 27 年間に 20 回行われ、孝武帝太元七年 382 にも 1 回行われている。この東夷〇〇国は、倭の構成部族で朝鮮半島に留まった部族たちと考えた。朝貢の原因としては、楽浪郡と帯方郡の弱体化と盟主の倭王が移住し、高句麗の南下の圧力か百済の韓の地での勃興が考えられる。四夷伝に書かれていないのは、韓とは別の国であったからであろう。

この東夷〇〇国の朝貢が始まった咸甯二年 276 が倭の移住の下限となると考える。女王国への旅程は魏の時代のものであるから、倭の移住は魏の時代に行われ、その上限は正始八年 247 である。三国志に書かれていることから、魏の滅亡の 265 年以前の可能性が高いが、魏の滅亡と帯方郡の接収とはタイム・ラグの可能性もあり、下限はこのままとする。作業仮説 5 と重複するが、その詳細版として次の作業仮説をおく。

作業仮説 13. 倭の移住は正始八年 247 から泰始初年 276 の間に行なわれた。

旅程の記事からの女王国の支配地域は、北九州の沿岸(玄界灘)地域と（博多湾の北か南かは判定できないが）21ヵ国である。これ以外に、倭王と諸部族の朝鮮半島の故地が考えられる。倭王朝にとっては、朝鮮半島の故地の維持よりも、日本列島をさらに支配していくことのほうが重要になってきたと考えられる。

日本書紀の記事からは、倭王に先行して移住した部族もいたことが示唆される。これらの部族に対しては、魏の印綬と黄幢が有効であったことが考えられ、このことが後の五王の朝貢に繋がると考える。移住の要因の１つで挙げた鉄鉱脈の枯渇を考えた。九州大学の伊都キャンパス建設地から元岡・桑原遺跡群が発見され、縄文から江戸時代まで　特に古墳時代・古代の遺跡が数々出土しているということである。(福岡 元岡製鉄遺跡群を訪ねて url は https://www.infokkkna.com/ironroad/dock/iron/7iron12.pdf ）残念ながら４世紀に遡る製鉄遺跡は報告されていない。

課題１には、神話研究における「加上説」が参考になると考えている。手法に対して説というのは少し違和感を覚えるが、結果として、そうなったという話と考える。Wiki「加上説」では、

後代に生まれた説話はその発展の歴史過程で、先発の説話より古い時代にそのルーツを求めて取り入れ加えられていき、複雑さを増していくものだという学説。古い神々ほど、後の世に新しく上に重ねられる傾向をもつとしている。いわば神話における加上説とは、主流派となる氏族の祭祀を続けつつ、置き場が無くなった非主流氏

族の神を古い時代にあったものとして組み入れたものが古代神話に残っているという仮説である。

この加上説と作業仮説 11 からは、神功皇后以前のこととして書かれていることは、実際は神功皇后以後のことと考えることができる。系譜関係の記事以外は殆ど内容のない欠史八代を除けば、神武天皇と、崇神天皇から仲哀天皇までである。加上説からは、初代の神武天皇が一番新しいことになり、仲哀天皇が神功皇后の次になる。

実際、景行天皇紀の主な内容は熊襲征討である。神武天皇紀には東征(東遷)の話(のみ)が書かれている。東遷の順序としてはこちらのほうが自然である。また、面白いことに、神武・崇神・応神と漢風諡号に神が含まれている天皇 3 人が重なってくることになる。これは、神功皇后に関する作業仮説 11 と同様のことがいえるのではないかという期待を抱かせる。

課題 2 で下限として挙げた遣隋使が派遣されたのは 607 年で、推古天皇十五 607 年の記事と隋大業三 607 年の記事が対応している。

この対応ほど確実ではないが、雄略天皇六年 461 の **呉國遣使貢獻** という記事と、宋書の世祖大明六年 462 の 詔曰 倭王世子興・・・という記事がある。これを基準とすれば、270 年から 460 までの 190 年を 70 年に縮めることになり、ハードルは高くなる。

作業仮説 12 からは、崩御の応神天皇四十一年は 436 年となり、在位期間は 396 年から 436 年となる。これには、倭王讃の朝貢した安帝の義熙九年 413 は含まれる。

作業仮説 14. 倭の五王の時代に倭の東遷が行われた。

付随して次を疑問としておく。

疑問 10. 東征はいつ始まり、終わったか。

疑問 11. 東征の出発地は何処か。

スケールは異なるが、アレキサンダー大王に見られるように征服地におかれた部隊が独立し王朝をたてたことが参考となる。東遷の過程でも同様なことが起き、並立していた王朝を 1 つにしたことが考えられないか。

4 世紀の倭王を扱っているのは日本書紀しかない。東遷を念頭において、日本書紀を調べていくことにより、上のイメージが肯定されるか否定されるか、どちらでもないかなど何らかの成果がえられることを目指していくが、三国史記の 500 年以前を眺めることから始める予定である。

エピローグ　（インテルメディオ）

　タイトルのように、本当に正史を彷徨よってしまったようだ。本稿はこの彷徨記録といえる。現状は、正史の海に、作業仮説というブイをおいた程度である。また範囲も古代史から見れば、最初の話題である卑弥呼周辺のみである。
　今後は、諸東夷伝を簡単に見た後、日本書紀・三国史記に対し、この作業を続けていくことにする。

　文献は実際に引用したもののみを記した。これ以外に学生時代から読んだものが刷り込まれて(imprinting されて)いるはずである。印象に残っているものは

　江上波夫「騎馬民族国家」中公新書、1967
　金達寿「日本のなかの朝鮮文化」
　松本清張「古代史疑」中央公論社、1968
　宮崎康平「まぼろしの邪馬台国」講談社、1967

である。この他に、井上光貞、上田正明、梅原猛、及び、今西錦司とその弟子たちの著作物などを読んだ。現在、これらの本は、荷物の底に沈んでいる。

　古代史に興味を再び抱くきっかけを述べておこう。古代遺跡を巡る旅は、あまり、面白いものではない。古代遺跡は、基本的には、石ころが転がっているに近い状況である。そこで、石仏の写真を撮

ることに興味が移っていった。石仏のうちに摩崖仏がある。日本では、大分県の大野川沿いには数多くの摩崖仏が見られる。大野川からは離れているが、臼杵石仏も近くにある。

現在は国宝に指定され、Google Map からは、覆堂が造られ、観光センターなどの建物が並んでいる。初めて訪れた四十年ほど前は、川沿いに駐車スペースがあり、石仏群の方には里山の路が続いているだけであった。

数年前に、こんな所に何故このような摩崖仏群ができたのかを考えるため、資料をあさることにした。鑑賞記的なものは多いが、由来について参考となるものは

京都大学文学部考古学教室編「豊後磨崖石仏の研究」京都帝国大学文学部 考古学研究報告第９冊、臨川書店、1976

が見つかったが、これは学術論文であり、簡単に読めそうにもなかった。ここで、真野長者の伝承に触れているのが気になり、この資料を探した結果、

真名野長者考 http://sence-net.com/manano.html

これに関連する説話を加えた

雑学の世界 > 炭焼小五郎

http://widetown.cocotte.jp/zatsugaku_main_detail.htm

を見つけた。

これを見ていると、これは「豊の国の歴史」をデフォルメしたものではないかと思えた。石仏がらみでは、国東半島も大分県にある。国東は「くにさき」と読むことになっている。これに関しては、この地を国の先という時代をもった国があったのであろうと思ったことがある。

豊の国にいて東に行ってしまったものでよく知られているのは邪馬台国である。ということで正史の東夷伝を読み始め、プロローグで述べた、韓条と倭(人)条の記述の差をみつけたことが本稿のきっかけとなった。

最後に、今後の彷徨予定を挙げておく。

Part II

韓　　後漢書 三国志 晋書

中国概略 漢四郡

Part III

高句麗の王統

百済の王統

新羅の王統

Part IV

九州支配　　崇神天皇紀 -- 神功皇后紀

宋書の時代　　倭の五王

付録 宋書・梁書などの東夷伝倭(国)条

Part V

神武東征　　神武天皇紀

縄文海進

倭の東遷　　応神天皇紀 -- 継体天皇紀

付録　後漢書・三国志・晋書の韓条と倭(倭人)条

後漢書卷八十五東夷列傳

(韓条)

韓有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁辰 馬韓在西，有五十四國 其北與樂浪 南與倭接 辰韓在東 十有二國 其北與濊貊接 弁辰在辰韓之南 亦十有二國 其南亦與倭接 凡七十八國 伯濟是其一國焉 大者萬餘戸 小者數韆傢 各在山海間 地郃/閤方四韆餘浬 東西以海為限 皆古之辰國也 馬韓最大 共立其種為辰王 都目支國 盡王三韓之地 其諸國王先皆是馬韓種人焉

馬韓人知田蠶 作綿佈 齣大慄如梨 有長尾雞/鷄 尾長五呎 邑落雜居 亦無城郭 作土室 形如冢 開戸在上 不知跪拜 無長幼男女之別 不貴金寶錦罽 不知騎乘牛馬 唯重瓔珠 以綴衣為飾 及縣頸垂耳 大率皆魁頭露彡介 佈袍草履 其人壯勇 少年有築室作力者 輒以繩貫脊皮 縋以大木 歡呼為健 常以五月田竟祭鬼神 晝夜酒會 群聚歌舞 舞輒數十人相隨 蹋地為節 十月農功畢 亦復/複如之 諸國邑各以一人主祭天神 號為“天君” 又立嚇/甦/蘇塗 建大木以縣鈴鼓 事鬼神 其南界近倭 亦有文身者

辰韓 耆老自言秦之亡人 避苦役 適韓國 馬韓割東界地與之 其名國為邦 弓為弧 賊為寇 行酒為行觴 相呼為徒 有似秦語 故或名之為秦韓 有城柵屋室 諸小別/彆邑 各有渠帥 大者名臣智 次有儉側 次有樊秖 次有殺奚 次有邑藉 土地肥美 宜五穀 知蠶桑 作縑佈 乘駕牛馬 嫁娶以禮 行者讓路 國齣鐵 濊 倭 馬韓並/併從市之 凡諸貿易 皆以鐵為貨 俗喜歌舞 飲酒 鼓瑟 兒生欲令其頭扁 皆押之以石

弁辰與辰韓雜居 城郭衣服皆同 語言風俗有異 其人形皆長大 美發/髮 衣服潔清 而刑法嚴峻 其國近倭 故頗有文身者

初 朝鮮王準為衛滿/滿所破 迺將其餘眾/衆數韆人走入海 攻馬韓 破之 自立為韓王 準後滅絕 馬韓人復/複自立為辰王 建武二十年 韓人廉斯人嚵/甦/蘇馬諟等 詣樂浪貢獻 光武封嚵/甦/蘇馬諟為漢廉斯邑君 使屬樂浪郡 四時朝謁 靈帝末 韓 濊並/併盛 郡縣不能製 百姓苦亂 多流亡入韓者

馬韓之西 海島上有州鬍國 其人短小 髡頭 衣韋衣 有上無下 好養牛豕 乘船往來 貨市韓中

（倭条）

倭在韓東南大海中 依山島為居 凡百餘國 自武帝滅朝鮮 使驛通于漢者三十許國 國皆稱王 世世傳統 其大倭王居邪馬壹/臺/颱國 樂浪郡徼 去其國萬二韆浬/裏/裡 去其西北界拘邪韓國七韆餘浬/裏/裡 其地大較在會稽東冶之東 與硃崖 儋耳相近 故其法俗多同 土宜禾稻 痲/痳紵 蠶桑 知織績為縑佈 齣白珠 青玉 其山有丹土 氣溫暖 鼕夏生菜茹 無牛 馬 虎 豹 羊 鵲 其兵有矛 楯 木弓 竹矢 或以骨為鏃 男子皆黥麵文身 以其文左右大小別/彆尊卑之差 其男衣皆橫幅結束相連 女人被發/髮屈彡介 衣如單被 貫頭而著之；並/併以丹硃坌身 如中國之用粉也 有城柵屋室 父母兄弟異處 唯會同男女無別/彆 飲食以手 而用籩豆 俗皆徒跣 以蹲踞為恭敬 人性嗜酒 多壽攷至百餘歲者甚眾/衆 國多女子 大人皆有四五妻 其餘或兩或三 女人不淫不妒 又俗不盜竊 少爭訟 犯法者沒其妻子 重者滅其門族 其死停喪十餘日 傢人哭泣 不進酒食 而等類就歌舞為樂 灼骨以蔔 用決

吉兇 行來度海 令一人不櫛沐 不食肉 不近婦人 名曰“持衰” 若在塗吉利 則僱以財物；如病疾遭害 以為持衰不謹 便共殺之

建武中元二年 倭奴國奉貢朝賀 使人自稱大伕 倭國之極南界也 光武賜以印綬 安帝永初元年 倭國王帥升等獻生口百六十人 願請見

桓 靈間 倭國大亂 更相攻伐 曆/歷年無主 有一女子各曰卑彌/瀰呼 年長不嫁 事鬼神道 能以妖惑眾/衆 于是共立為王 侍婢鞮人 少有見者 唯有男子一人給飲食 傳辭語 居處宮室 樓觀城柵 皆持兵守衛 法俗嚴峻

自女王国东度海千余里 至拘奴国 虽皆倭种 而不属女王 自女王国南四千余里 至硃儒国 人长三四尺 自硃儒东南行船一年 至裸国 黑齿国 使驿所传 极于此矣

会稽海外有东鯷人 分为二十余国 又有夷洲及澶洲 传言秦始皇遣方士徐福将童男女数千人入海 求蓬莱神仙不得 徐福畏诛不敢还 遂止此洲 世世相承 有数万家 人民时至会稽市 会稽东治县人有入海行遭风 流移至澶洲者 所在绝远 不可往来

三國志魏書三十烏丸鮮卑東夷傳

（韓条）

韓在帶方之南 東西以海爲限 南與倭接 方可四千里 有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 辰韓者 古之辰國也 馬韓在西 其民土著 種植 知蠶桑 作綿布 各有長帥 大者自名爲臣智 其次爲邑借 散在山海間 無城郭 有爰襄國 牟水國 桑外國 小石索國 大石索國 優休牟涿國 臣濆沽國 伯 濟國 速盧不斯國 日華國 古誕者國 古離國 怒藍國 月支國 咨離牟盧國 素謂乾國 古爰國 莫盧國 卑離國 占離卑國 臣釁國 支侵國 狗盧國 卑彌 國 監奚卑離國 古蒲國 致利鞠國 冉路國 兒林國 駟盧國 內卑離國 感奚國 萬盧國 辟卑離國 臼斯烏旦國 一離國 不彌國 支半國 狗素國 捷盧 國 牟盧卑離國 臣蘇塗國 莫盧國 古臘國 臨素半國 臣雲新國 如來卑離國 楚山塗卑離國 一難國 狗奚國 不雲國 不斯濆邪國 爰池國 乾馬國 楚離 國 凡五十餘國 大國萬餘家 小國數千家 總十餘萬戶 辰王治月支國 臣智或加優呼臣雲遣支報安邪踧支濆臣離兒不例拘邪秦支廉之號 其官有魏率善 邑君歸義侯 中郎將 都尉 伯長

侯准既僭號稱王 爲燕亡人衛滿所攻奪 魏略曰：昔箕子之後朝鮮侯 見周衰燕自尊 爲王 欲東略地 朝鮮侯亦自稱爲王 欲興兵逆擊燕以尊周室 其大夫禮諫之 乃止 使禮西說燕 燕止之 不攻 後子孫稍驕虐 燕乃遣將秦開攻其西方 取地二 千餘里 至滿番汗爲界 朝鮮遂弱 及秦並天下 使蒙恬築長城 到遼東 時朝鮮王否立 畏秦襲之 略服屬秦 不肯朝會 否死 其子准立 二十餘年而陳 項 起 天下亂 燕 齊 趙民愁苦 稍稍亡往准 准乃置之於西方 及漢以盧綰爲燕王 朝鮮與燕界於浿水 及綰反 入匈奴 燕人衛滿亡命 爲胡服 東度浿水 詣 准降 說准求居西界 （故）中國亡命爲朝鮮籬屏 准信寵之 拜爲博士 賜以圭 封之百里 令

守西邊 滿誘亡黨 衆稍多 乃詐遣人告准 言漢兵十道至 求入 宿衛 遂還攻准 准與滿戰 不敵也 將其左右宮人走入海 居韓地 自號韓王 〈魏略曰：其子及親留在國者 因冒姓韓氏 准王海中 不與朝鮮相往來 〉其後絕滅 今韓人猶有奉其祭祀者 漢時屬樂浪郡 四時朝謁 魏略曰：初 右渠未破時 朝鮮相 曆谿卿以諫右渠不用 東之辰國 時民隨出居者二千餘戶 亦與朝鮮貢蕃不相往來 至王莽地皇時 廉斯鑡爲辰韓右渠帥 聞樂浪土 地美 人民饒樂 亡欲來降 出其邑落 見田中驅雀男子一人 其語非韓人 問之 男子曰：「我等漢人 名戶來 我等輩千五百人伐材木 爲韓所擊得 皆斷發爲 奴 積三年矣 」鑡曰：「我當降漢樂浪 汝欲去不？」戶來曰：「可 」（辰）鑡因將戶來（來）出詣含資縣 縣言郡 郡即以鑡爲譯 從芩中乘大船入辰韓 逆 取戶來 降伴輩尚得千人 其五百人已死 鑡時曉謂辰韓：「汝還五百人 若不者 樂浪當遣萬兵乘船來擊汝 」辰韓曰：「五百人已死 我當出贖直耳 」乃出辰 韓萬五千人 弁韓布萬五千匹 鑡收取直還 郡表鑡功義 賜冠幘 田宅 子孫數世 至安帝延光四年時 故受復除

桓 靈之末 韓濊強盛 郡縣不能制 民多流入韓國 建安中 公孫康分屯有縣以南荒地爲帶方郡 遣公孫模 張敞等收集遺民 興兵伐韓濊 舊民稍 出 是後倭韓遂屬帶方 景初中 明帝密遣帶方太守劉昕 樂浪太守鮮于嗣越海定二郡 諸韓國臣智加賜邑君印綬 其次與邑長 其俗好衣幘 下戶詣郡朝謁 皆假 衣幘 自服印綬衣幘千有餘人 部從事吳林以樂浪本統韓國 分割辰韓八國以與樂浪 吏譯轉有異同 臣智激韓忿 攻帶方郡崎離營 時太守弓遵 樂浪太守劉茂興 兵伐之 遵戰死 二郡遂滅韓

其俗少綱紀 國邑雖有主帥 邑落雜居 不能善相制禦 無跪拜之禮 居處作草屋土室 形如塚 其戶在上 舉家共在中 無長幼男女之別 其葬有槨無 棺 不知乘牛馬 牛馬盡於送死 以瓔珠爲財寶 或以綴衣爲飾 或以縣頸垂耳 不以金銀錦繡爲珍 其人性強勇 魁頭露紒 如炅兵 衣

布袍 足履革蹻蹋 其國 中有所爲及官家使築城郭 諸年少勇健者 皆鑿脊皮 以大繩貫之 又以丈許木鍤之 通日嚾呼作力 不以爲痛 既以勸作 且以爲健 常以五月下種訖 祭鬼神 群聚歌舞 飲酒晝夜無休 其舞 數十人俱起相隨 踏地低昂 手足相應 節奏有似鐸舞 十月農功畢 亦復如之 信鬼神 國邑各立一人主祭天神 名之天君 又 諸國各有別邑 名之爲蘇塗 立大木 縣鈴鼓 事鬼神 諸亡逃至其中 皆不還之 好作賊 其立蘇塗之義 有似浮屠 而所行善惡有異 其北方近郡諸國差曉禮 俗 其遠處直如囚徒奴婢相聚 無他珍寶 禽獸草木略與中國同 出大栗 大如梨 又出細尾雞 其尾皆長五尺餘 其男子時時有文身 又有州胡在馬韓之西海中大 島上 其人差短小 言語不與韓同 皆髡頭如鮮卑 但衣韋 好養牛及豬 其衣有上無下 略如裸勢 乘船往來 市買韓中

辰韓在馬韓之東 其耆老傳世 自言古之亡人避秦役來適韓國 馬韓割其東界地與之 有城柵 其言語不與馬韓同 名國爲邦 弓爲弧 賊爲寇 行酒爲 行觴 相呼皆爲徒 有似秦人 非但燕 齊之名物也 名樂浪人爲阿殘；東方人名我爲阿 謂樂浪人本其殘餘人 今有名之爲秦韓者 始有六國 稍分爲十二國

弁辰亦十二國 又有諸小別邑 各有渠帥 大者名臣智 其次有險側 次有樊濊 次有殺奚 次有邑借 有已柢國 不斯國 弁辰彌離彌凍國 弁辰接塗國 勤耆國 難彌離彌凍國 弁辰古資彌凍國 弁辰古淳是國 冉奚國 弁辰半路國 弁樂奴國 軍彌國〈弁軍彌國〉 弁辰彌烏邪馬國 如湛國 弁辰甘路國 戶路國 州鮮國（馬延國） 弁辰狗邪國 弁辰走漕馬國 弁辰安邪國〈馬延國〉 弁辰瀆盧國 斯盧國 優由國 弁 辰韓合二十四國 大國四五千家 小國六七百家 總四五萬戶 其十二國屬辰王 辰王常用馬韓人作之 世世相繼 辰王不得自立爲王 〈魏略曰：明其爲流

移之人 故爲馬韓所制 〉土地肥美 宜種五穀及稻 曉蠶桑 作縑布 乘駕牛馬 嫁娶禮俗 男女有別 以大鳥羽送死 其意欲使死者飛揚 魏略曰：其國作屋 橫累木爲之 有似牢獄也 國出鐵 韓 濊 倭皆從取之 諸市買皆用鐵 如中國用錢 又以供給二郡 俗喜歌舞飲酒 有瑟 其形似築 彈之亦有音曲 兒生 便以石厭其頭 欲其褊 今辰韓人皆褊頭 男女近倭 亦文身 便步戰 兵仗與馬韓同 其俗 行者相逢 皆住讓路

弁辰與辰韓雜居 亦有城郭 衣服居處與辰韓同 言語法俗相似 祠祭鬼神有異 施灶皆在戶西 其瀆盧國與倭接界 十二國亦有王 其人形皆大衣服絜清 長髮 亦作廣幅細布 法俗特嚴峻

（倭人条）

倭人在帶方東南大海之中 依山島爲國邑 舊百餘國 漢時有朝見者 今使譯所通三十國 從郡至倭 循海岸水行 曆韓國 乍南乍東 到其北岸狗邪韓國 七千餘里 始度一海 千餘里至對馬國 其大官曰卑狗 副曰卑奴母離 所居絕島 方可四百餘里 土地山險 多深林 道路如禽鹿徑有千餘戶 無良田 食海物自活 乖船南北市糴 又南渡一海千餘 里 名曰瀚海 至一大國 官亦曰卑狗 副曰卑奴母離 方可三百里 多竹木叢林 有三千許家 差有田地 耕田猶不足食 亦南北市糴 又渡一海 千餘里至末盧 國 有四千餘戶 濱山海居 草木茂盛 行不見前人 好捕魚鰒水無深淺 皆沈沒取之 東南陸行五百里 到伊都國 官曰爾支 副曰泄謨觚 柄渠觚 有千餘 戶 世有王 皆統屬女王國 郡使往來常所駐 東南至奴國百里 官曰兜馬觚 副曰卑奴母離 有二萬餘戶 東行至不彌國百里 官曰多模 副曰卑奴母離 有千餘 家 南至投馬國 水行二十日 官曰彌彌 副曰彌彌那利 可五萬餘戶 南至邪馬壹國 女王之所都 水行十日 陸行一月 官有伊支馬 次曰彌馬升 次曰彌馬獲 支 次曰奴佳

鞮 可七萬餘戶 自女王國以北 其戶數道里可得略載 其餘旁國遠絕不可得詳 次有斯馬國 次有已百支國 次有伊邪國 次有都支國 次有彌奴 國 次有好古都國 次有不呼國 次有姐奴國 次有對蘇國 次有蘇奴國 次有呼邑國 次有華奴蘇奴國 次有鬼國 次有爲吾國 次有鬼奴國 次有邪馬國 次有躬臣國 次有巴厘國 次有支惟國 次有烏奴國 次有奴國 此女王境界所盡 其南有狗奴國 男子爲王 其官有狗古智卑狗 不屬女王 自郡至女王國萬二千餘里

男子無大小皆黥面文身 自古以來 其使詣中國 皆自稱大夫 夏後少康之子封於會稽 斷發文身以避蛟龍之害 今倭水人好沈沒捕魚蛤 文身亦以厭大 魚水禽 後稍以爲飾 諸國文身各異 或左或右 或大或小 尊卑有差 計其道里 當在會稽 東冶之東 其風俗不淫 男子皆露紒 以木綿招頭 其衣橫幅 但結 束相連 略無縫 婦人被發屈紒 作衣如單被穿其中央 貫頭衣之 種禾稻 紵麻 蠶桑 緝績 出細紵 縑綿 其地無牛馬虎豹羊鵲 兵用矛 楯 木弓 木弓 短下長上 竹箭或鐵鏃或骨鏃 所有無與儋耳 硃崖同 倭地溫暖 冬夏食生菜 皆徒跣 有屋室 父母兄弟臥息異處 以硃丹塗其身體 如中國用粉也 食飲用籩 豆 手食 其死有棺無槨 封土作塚 始死停喪十餘日 當時不食肉 喪主哭泣 他人就歌舞飲酒 已葬 舉家詣水中澡浴 以如練沐 其行來渡海詣中國 恆使一人 不梳頭 不去蟣虱 衣服垢汙 不食肉 不近婦人 如喪人 名之爲持衰 若行者吉善 共顧其生口財物；若有疾病 遭暴害 便欲殺之 謂其持衰不謹 出 真珠 青玉 其山有丹 其木有柟 杼 豫樟 楺櫪 投橿 烏號 楓香 其竹筱簳 桃支 有薑 橘 椒 蘘荷 不知以爲滋味 有獼猴 黑雉 其俗舉事行來 有所雲爲 輒灼骨而蔔 以占吉凶 先告所蔔 其辭如令龜法 視火坼占兆 其會同坐起 父子男女無別 人性嗜酒 〈魏略曰：其俗不知正歲四節 但計春耕秋收爲年紀 〉見 大人所敬 但搏手以當跪

拜 其人壽考 或百年 或八九十年 其俗 國大人皆四五婦 下戶或二三婦 婦人不淫 不妒忌 不盜竊 少諍訟 其犯法 輕者沒其妻 子 重者滅其門戶 及宗族尊卑 各有差序 足相臣服 收租賦 有邸閣國 國有市交易有無 使大倭監之 自女王國以北 特置一大率 檢察諸國 諸國畏憚 之 常治伊都國 於國中有如刺史 王遣使詣京都 帶方郡 諸韓國及郡使倭國 皆臨津搜露 傳送文書賜遺之物詣女王 不得差錯 下戶與大人相逢道路 逡巡 入草 傳辭說事 或蹲或跪 兩手據地 爲之恭敬 對應聲曰噫 比如然諾

其國本亦以男子爲王 住七八十年 倭國亂 相攻伐歷年 乃共立一女子爲王 名曰卑彌呼 事鬼道 能惑衆 年已長大 無夫婿 有男弟佐治國 自爲王以來 少有見者 以婢千人自侍 唯有男子一人給飲食 傳辭出入居處宮室樓觀 城柵嚴設 常有人持兵守衛

女王國東渡海千餘里 復有國 皆倭種 又有侏儒國在其南 人長三四尺 去女王四千餘里 又有裸國 黑齒國復在其東南 船行一年可至 參問倭地 絕在海中洲島之上 或絕或連 周旋可五千餘里

景初二年六月 倭女王遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻 太守劉夏遣吏將送詣京都 其年十二月 詔書報倭女王曰：「制詔親魏倭王卑彌呼：帶方太 守劉夏遣使送汝大夫難升米 次使都市牛利奉汝所獻男生口四人 女生口六人 班布二匹二丈 以到 汝所在逾遠 乃遣使貢獻 是汝之忠孝 我甚哀汝 今以汝爲 親魏倭王 假金印紫綬 裝封付帶方太守假授汝 其綏撫種人 勉爲孝順 汝來使難升米 牛利涉遠 道路勤勞 今以難升米爲率善中郎將 牛利爲率善校尉 假銀 印青綬 引見勞賜遣還 今以絳地交龍錦五匹 〈臣松之以爲地應爲綈 漢文帝著皁衣謂之弋綈是也 此字不體 非魏朝之失 則傳寫者誤也 〉絳地縐粟罽十張 蒨絳五十匹 紺青五十匹 答汝所獻貢直 又特賜汝紺地句文錦三匹 細班華罽五張

白絹五十匹 金八兩 五尺刀二口 銅鏡百枚 真珠 鉛丹各五十斤 皆裝封付難升米 牛利還到錄受 悉可以示汝國中人 使知國家哀汝 故鄭重賜汝好物也 」

正始元年 太守弓遵遣建中校尉梯俊等奉詔書印綬詣倭國 拜假倭王並齎詔賜金 帛 錦罽 刀 鏡 采物 倭王因使上表答謝恩詔 其四年 倭王復 遣使大夫伊聲耆 掖邪狗等八人 上獻生口 倭錦 絳青縑 綿衣 帛布 丹木 犬付 短弓矢 遣塞曹掾史張政等因齎詔書 黃幢 拜假難升米爲 檄告喻之 卑彌呼以死 大作塚 徑百餘步 徇葬者奴婢百餘人 更立男王 國中不服 更相誅殺 當時殺千餘人 復立卑彌呼宗女壹與 年十三爲王 國中遂定 政等以檄告喻壹與 壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還 因詣台 獻上男女生口三十人 貢白珠五千 孔青大句珠二枚 異文雜錦二十匹 掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬 其六年 詔賜倭難升米黃幢 付郡 假授 其八年 太守王頎到官 倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和 遣倭載斯 烏越等詣郡說相攻擊狀

晋書 卷九十七 列傳第六十七 四夷傳

(馬韓 辰韓 弁韓)

韓種有三 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 辰韓在帶方南 東西以海爲限

馬韓居山海之間 無城郭 凡有小國五十六所 大者萬戶 小者數千家 各有渠帥俗少綱紀 無跪拜之禮 居處作土室 形如塚 其戶向上 舉家共在 其中 無長幼男女之別 不知乘牛馬 畜者但以送葬 俗不重金銀錦罽 而貴瓔珠 用以綴衣或飾發垂耳 其男子科頭露紒 衣布袍 履草蹻 性勇悍 國中有所調 役 及起築城隍 年少勇健者皆鑿其背皮 貫以大繩 以杖搖繩 終日歡呼力作 不以爲痛 善用弓楯矛櫓 雖有鬥爭攻戰 而貴相屈服 俗信鬼神 常以五月耕種 畢 群聚歌舞以祭神 至十月農事畢 亦如之 國邑各立一人主祭天神 謂爲天君 又置別邑 名曰蘇塗 立大木 懸鈴鼓 其蘇塗之義 有似西域浮屠也 而所行 善惡有異

武帝太康元年 二年 其主頻遣使入貢方物 七年 八年 十年 又頻至

太熙元年詣東夷校尉何龕上獻 咸寧三年復來 明年又請內附

辰韓在馬韓之東 自言秦之亡人避役入韓 韓割東界以居之 立城柵 言語有類秦人 由是或謂之爲秦韓 初有六國 後稍分爲十二 又有弁辰亦十二國 合四五萬戶 各有渠帥 皆屬於辰韓 辰韓常用馬韓人作主 雖世世相承 而不得自立 明其流移之人 故爲馬韓所制也 地宜五穀俗饒蠶桑 善作縑布 服 牛乘馬 其風俗可類馬韓 兵器亦與之同 初生子 便以石押其頭使扁 喜舞 善彈瑟 瑟形似築。

武帝太康元年 其王遣使獻方物 二年復來朝貢 七年又來

（倭人）

倭人在帶方東南大海中 依山島爲國 地多山林 無良田 食海物 舊有百餘小國相接 至魏時有三十國通好 戶有七萬 男子無大小 悉黥面文身 自謂太伯之後 又言上古使詣中國 皆自稱大夫 昔夏少康之子封於會稽 繼發文身以避蛟龍之害 今倭人好沈沒取魚 亦文身以厭水禽 計其道里 當會稽東冶之東 其男子衣以橫幅 但結束相連 略無縫綴 婦人衣如單被 穿其中央以貫頭 而皆被發徒跣 其地溫暖 俗種禾稻糸甯麻而蠶桑織績 土無牛馬 有刀楯弓箭 以鐵爲鏃 有屋宇 父母兄弟臥息異處 食飲用俎豆 嫁娶不持錢帛 以衣迎之 死有棺無槨 封土爲塚 初喪 哭泣 不食肉 已葬 舉家入水澡浴自潔 以除不祥 其舉大事 輒灼骨以占吉凶 不知正歲四節 但計秋收之時以爲年紀 人多壽百年 或八九十 國多婦女 不淫不妒 無爭訟 犯輕罪者沒其妻孥 重者族滅其家 舊以男子爲主 漢末 倭人亂 攻伐不定 乃立女子爲王 名曰卑彌呼 宣帝之平公孫氏也 其女王遣使至帶方朝見 其後貢聘不絕 及文帝作相 又數至 泰始初 遣使重譯入貢

プロローグ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1.　後漢書の時代（倭奴国と邪馬臺国）・・・・・・・・・・・11
1.1 倭の位置　12
1.2 後漢書倭条の記事　16
1.3 倭奴国　23
1.4 倭国大乱　27
1.5 共立為王　31
2.　三国志の時代（女王国と邪馬壹國）・・・・・・・・・・・35
2.1 韓条　39
2.2 三国志倭人条の記事　44
2.3 倭女王卑弥呼　51
2.4 女王国への旅程　54
2.5 自女王國以北　65
3.　晋書の記事　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
3.1　晋書の記事　71
3.2　壱与と台与　78
3.3　神功皇后紀　魏志云　82
3.4　課題に対するイメージ　88
エピローグ（インテルメディオ）・・・・・・・・・・・・・・・92
付録　後漢書・三国志・晋書の韓条と倭(倭人)条・・・・・95
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106